
青春謳華

桂木 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春謳華

【Zコード】

N1465D

【作者名】

桂木 景

【あらすじ】

冴えない男、陽介。彼を巡る女性達。モテないはずの彼が西城に告白したことによりついにモテ始め…。軽音楽を中心に描いて参ります。

「俺は西城のことが好きだ！！」

校舎裏で俺は中学一番美女、西城 明日香さいじょうあすかに告白した。

「まあ、予想はしてたんだけど。」

え？ いきなりこういう展開つてアリ？

「俺じゃダメかな？ スポーツも人並みに出来るし、頭も悪くない」と思つんだけど。」

「ん～どうしようかなあ～。」

西城は焦らす、焦らす、焦らす。

俺は耐える。耐える。耐える。

「そんな田でみないでよ～。仕方ないな。付き合つてあげるよ。」

「おっしゃああああ～！～！」

「でも私、君のこと良く知らないし…。」

「俺、小谷陽介。」

「西城明日香です。それじゃあ明日から一緒に登校しようか？」

西城さんから誘つてくれるなんて、俺もう幸せ。

とこつわけで翌日。

俺は西城と仲良くな（？）並んで登校しているのだった。

「誰？あの隣のサイ男。西城さんと釣り合つてないよ。」

「アイツもしかして俺の西城さんと付き合つてるんじゃないだろうな？」

「俺西城さんと一緒に登校してえよ。」

「口ロス、口ロス、口ロス。」

なんか周りの視線が痛い。

「雰囲気悪くない？」

何を話して良いか分からなかつた俺は適当なことを言つてみた。

「え？ そうかな？ いつもと同じだよ。陽介、私と一緒に緊張してるんじゃない？」

「え？ 今なんて？ 陽介？ もしかして下の名前で呼んだ？？？」

「今、下の名前で呼ばなかつた？」

「呼んだよ。なんか変だつた？」

「めっちゃ嬉しいです！！」

「おい、陽介！ ループ×ループの新曲でたぞーつて西城さん？！」

「オッス！」

敬礼して挨拶している姿はなんと言えばいいのやら…愛くるしいぜ。

「なぜに陽介と西城さんが？！ もしかして二人付き合つてる？」「茶髪でちょっと格好いいからつて隆史！ 恥ずかしいこと聞くんじやねえ！ 周りのギャラリーが耳を澄ませてるじやねえか！」

「そうだよ。私たち付き合つてるんだあ。」

力チーン。絶対零度に突入しました。

「マジで？」

「マジだよ。俺が西城と付き合つて悪いかよ。」

「だよねえー。そろそろ急がないと一人とも遅刻しちゃうわ。」

西城は俺たちを置いて先に歩き始めた。

「おい、隆史行くぞ。西城に置いてかれちまつ。」

俺は依然と固まつたままの隆史を置いて、西城と一緒に校門を潜つた。

「それじゃあ、お昼休みでね。屋上でまつてるよ。」

かわいく手を振つて2組の教室に西城は消えていった。

¶ ハート画 (福井)

少し長い田になつます。
すいません。

合コン計画

俺と西城が付き合つていいとこいつ噂（？）はあつとこいつ間に合まつた。クラスの連中はその話でもちきりだ。男子数名西城の落とし方を聞きに来た奴がきたが軽くあしらつておいた。

「陽介、なかなかやるな。俺は西城に興味は無かつたけど、まさかお前とは…。油断も隙もねえ男だぜ。」

「うるせえよ。お前の方は大丈夫なのかよ。」

「如月か？ 日曜、みんなでカラオケ行くことになつてるんだけど、そこで近付こうつて計画。」

隆史が狙つているのは如月 早紀。小説家になるのが夢らしくて、いつも教室の端っこでノートにいろいろ書いている。眼鏡をかけていて男子どもは気付いてないんだろうけど（ていうか、影薄い…）かなりの美貌の持ち主。西城には負けるがな。ちなみに俺と如月は小学校からのダチ。

「アホらし。如月がそんなので出てくるわけないだろ。」

「それがさあ、陽介も行くつて言つたらOKしてくれたんだ。」

「ほう。良かつたじゃんか…。つてオイ！ いつ俺が行くつて言ったんだよ。勝手に決めんなよ。」

「まあ、いいじゃんか。西城も連れてこいや。」

「俺は西城と二人だけで楽しみたいんだ。何が悲しくて合コンなんぞに付き合わなくちゃならんのだ…！」

「じゃ、如月にお前から行かないつてこと伝えてくれよ。そういう事言つの苦手なんだよ。」

「分かった。」

俺は隆史に思いつきり殺氣を送りながら如月の席まで向かった。

「如月、ちょっとといいか？」

「何？」

「日曜のカラオケの件なんだけれど…。」

「ああ…よつちやんも行くんでしょ？久しづりだからなんだか楽し
みで。」

うつむき加減に頬を赤く染める。なんだか、言いにくい雰囲気だぜ。
「隆史が俺も行くって言つたらしいけど。俺、別の用事があって
無理なんだよ。わざと、隆史に言わねばかりでさ。」

「そつなんだ…。よつちやん行かないなら私もやめといつかな…。
声がか細くなつて行く。一体どうしたらいいんだ、俺！

「隆史とかもいるから楽しめると思つけど。」

「あんまり知らないし…。」

だんだん惨めに思えてきたよ。そつだよな。如月、俺と一緒にじゃな
いと何にも出来ないんだつたよな。

「分かつた、分かつた。なんとか都合つけて行けるよつとするよ。
だからそんな顔するなよ。」

「え！？ いいよ。そんなつもりで言つたんじゃないし。よつちやん、
西城さんとの用事でしょ？」

「まあ、そつなんだけれど…。西城にも相談してみて行くよつとす
るよ。」

「え…でも…。」

「うだうだ言つな。俺も行くんだからいいだろ。」

「うん。そうだね。ありがとつ。」

満面の笑みで返してくれる。眼鏡を取つたらかわいいんだけどなあ…。
つて何いつてんだ俺！

自分の席に帰つてくると一タ一タ笑つて居る隆史がいた。

「お前も来るんだろ？」

「場所どコだ？」

「駅前のジャンカラ。」

「何時？」

「朝の9時。」

「は？！9時だ？？早すぎねえのか？」

「普通だろ。一日中歌いまくるぜ。」

「金無いんだけど…。」

「歌い放題300円チケット持つてるから大丈夫。」

「で、メンバーは？」

「俺とお前、西城と如月。」

「おま…。初めから俺が来ることになつてたんだな。」

「なんたつてようちやんは如月に弱いからな。」

「その呼び方するなあああ！！（怒）

まあ、屋上で会うことになつてるからその時にでも言おう。

つまりん授業を聞き流し、待ちに待つた昼休み。西城の待つ屋上へ走る。

勢いよくドアを開けるとそこは…

弁当を喰うカツプルだらけだつたorz

俺と西城の一人きりの時間になるはずが…。そんなことよりもこの空気は正直、居たまれない。ドアを閉めて待機することにしよう。

「じめーん。体育だつたから遅れちゃつた。」

チョロッとベロを出して謝る姿に免じて許すことしようか。俺つて本当に弱いな（泣

「早速で悪いんだけど…。」

西城が作つてきてくれた弁当を口に放り込んだ俺は口火切つた…！

「ん？」

西城も自分で作つた弁当を口に運んで固まる。

『マズ…。』

始めて二人の気持ちが一緒になつた瞬間だつた。メッチャ弁当不味かつたけど。

「やっぱ味噌入れたのが失敗だつたのかな…？」

いやいや、味噌なんか混入してたんですか…。不味い理由は西城流のアレンジにあつたわけだ。って、カラオケのこときちんと言わないと。

「それよりも、今度の日曜なんだけどさ。斎藤とかとカラオケ行かない？」

「え？ 本当ー？ すつぐく歌、歌いたかつたんだ！！ 行こう、行こう

！！」

なんだ、心配するほどのことじやなかつたんだ。

「それじや……。」

俺たちは周りの奴らが手と手を取り合つてキスしますまで、歌手について語り合つた。

カラオケ

日曜日。カラオケ当日。

「チース。」

「遅いぞ、陽介！」

「齊藤くん、オハヨ。」

「西城さん、おはよう。」

なんなんだアイツのあの変わり様は。

「如月おはよー。」

「ようちやん、オハヨ。西城さんもおはよう。」

「如月さん、西城さんじやなくて明日香でいいよー。他人行儀じやん。」

「え？！でも…。」

「西城がそう言つてるんだから、それでいいんじゃないかな？」

俺は援軍を出す。

「陽介もいつまでも西城とか言わない！ちやんと明日香つて呼んでよね。」

「いや…その…。」

如月の普段の気持ちがよく分かる…。

「まあまあ、立ち話もなんだからさつと入りやが。」

「こうこう時は隆史の奴、役に立つな。」

「そうだね。今日はイッパイ歌っちゃおうーー！」

「如月、行くか。」

「うん。」

俺たちは部屋に入った。予め隆史の奴が予約してたみたいで広くていい。

「さてと、ピザとポテトと…。西城さん何飲む？」

隆史の奴、妙に手慣れてやがる。わざとオーダー出しちまつた。

「そうだねえ…。紅茶」

「りょーかーい。如月は?」

「オレンジジュースで。」

「はーい。…注文もしたことだし、歌いますか。」

「ちょっと待てええ!!俺はどうした??」

「え?あ、なんだ。いたのか。初めからそう言えよ。」

隆史の奴、完全に調子のつてやがる…（怒）

「アハハ。二人つていつもそんな調子なの?漫才みたいじゃん。」

「齊藤くん、今日はやけにテンション高いね。」

「そうか?で、陽介はコーラだろ。もう頼んでるつて。」

チツ。点数稼ぎしやがつて。

「じゃあ、初めは西城さんから~。」

「ん~じやあ…ねえ…。」

西城が選んだのはキューイーハーーだ。んじや、俺もアニソン路線で突っ切ることにするか。

俺たちは散々アーノンで盛り上がり、結局夕方まで歌い通しだつた。

「明日香さん、もう歌えません…。」

「何いつてんの?これからだよ。つて陽介まで倒れてるし。」

テンション上げすぎた反動だらうか。西城の異常にまで上がったテンションに付いていけず、ダウンしてしまった。

「西城…もう無理…。喉痛いわ。」

「しようがないな…。最後に一曲だけ。ね?」

「一曲だからな…。」

西城のいたいけな瞳に勝つことが出来ず、俺は気力を振り絞つて歌うこと。

「じゃ、チエリーね。」

西城と最後に歌つたチエリー。喉がつぶれてしまつて声が満足に出せなかつたけど、最高のデュエットだつた。

西城、怒

俺にとつて西城との登校は正直辛い…。なんでかつていうと、周りの目が一番痛いからだ。女性陣は俺たちの交際を受け入れてくれたみたいだが、男性陣の（特に西城ファン）恨み・ねたみの視線が…。問題の西城はとつと、男性陣の視線など軽くスルー（つてアピツてる？）して、俺の腕に絡みついてきたりしている。

「陽介！話聞いてる？」

「悪い。考え事してた。」

「もう～、怒っちゃうよー！」

ん～怒った西城の顔もきつとかわいいんだろうな…。って何いつてんだ俺！（汗

「「めん、「」めん。」

「ボーッとしてるから学校に着いけやつたじやない！知らないんだから！」

あ～あ、頬をふくらませて怒る姿もめつちやかわいいな。

俺の妄想を振り切るかのようなスピードで西城は靴を履き替えて教室に向かってしまった。

「西城を怒らせたんだろ？」

席に着くとそうそうウザイ奴がやつてきた。

「なんで分かるんだよ。」

「お前見りやわかるよ。」

「そんなこと書いてないぞ。」

「心にしつかりと書いてあるわ。」

『……』

こいつ、読心術つかえんのか。

「つていうのは冗談。ずっとお前の後ろにいたからさ。」

確かに隆史の手には鞄が握られている。

「で、西城はなんて？」

「遠坂恵美のライブがどうとか…。」

遠坂恵美、今話題のアイドルだ。容姿、歌唱力共に完璧で、ましてやライブのチケットなど3時間で完売してしまつ。まさか遠坂のライブに連れて行けつて言つんじやないだろうな。

「マジか。お前の話信用できないから昼休み、西城に直接聞くことにするわ。」

「なんかそれって結構傷つくぜ。」

「プライドないから大丈夫だろ？』

「それもそつだがな。』

西城のことを考えていたら午前中の授業なんか一瞬で終わつてしまつた。そんな中、一抹の不安を抱きながら俺は午前の授業終了後屋上へ向かう。

「今朝のことなんだけどさ。』

弁当を開けていた西城の手が止まる。

「知らない。』

頬を膨らませながらまたしても怒つてしまつた。

「遠坂のライブの事だろ？お、この卵焼きウメH。』

弁当を口に運んだ俺は、お世辞なしの率直な感想を述べた。

「本当？！それ自信作なんだ。しかたないな。教えてあげるよ。あのね、お父さんに音楽関係の知り合いがいて、その人が遠坂恵美のライブチケットを2枚貰つてきたんだ！！！」

西城は財布から大事そうにチケットを出した。確かに遠坂恵美のライブのチケットだ。てか、これ初回限定のかなりイイ位置じやん。

「もしかして一人でいくの？』

「あつたりまえじやん。今週の土曜だよ。』

え～っと今日は木曜日だから……明後日じやん！！！

「土曜！？場所は？』

「厚生年金会館。電車で20分の所だよ。」

「OK、OK。予定入れとくね。」

まあ、こんな寒い時期にドコ行くか正直迷っていた俺にとってはかなりの朗報だ。西城には感謝しないとな。

「エミちゃんって私たちと同じ年なんだよ？知つてた？」

「マジ？トップアイドルなんだから年上だと思つてたよ。」

「あはは。それってエミちゃんが老けてるってことだよね？！それとも陽介の目が悪いのかな？」

「おいおい、からかうなつて。」

せっかく話が弾んできたのに、予鈴が鳴った。ふう、帰り道でも話の続きをするか。

「陽介次体育だよね。」

「なんで知つてんの？」

「いつも窓から見てたから。」

西城はすこし顔を赤くしてそういった。それって前から俺を見てたって事か？いやしかし、恥ずかしいな。

俺は体育を理由にその場から逃げ去るように教室へ向かった。

「で、どうだつたんだ？」

準備体操中に隆史が話しかけてきた。

「遠坂エミのライヴに一人で行くことになつた。」

周りの奴らが聞き耳を立てていてるのに薄々気付いていた。しかし、ここでやめると変な噂が流れちまうからな。我慢、我慢。

「もしかしてチケット西城さんに奢らせたの？」

おいおい、そんな物騒なこと言つなよ。周りの男子が殺氣立つてんじゃないか。

「そんなわけねえだろ。複雑なんだが、西城の親父さんの知り合いが音楽関係の仕事をしてるらしくて、そこからチケットを入手したんだと。だから西城は一円も払つてないからな。」

「へ～。羨ましい限りだな。で、チケットって2枚だけなのか？」

「ずいぶんと厚かましい奴だな。前から知つてたがな。」

「そこら辺は知らんが、もし余分に合つたとしてもお前にはあげないからな。どうぜ付いてくるつもりだろ？」

「さすが親友。よく見抜いたな。」

「本命は西城じやないんだろ？」

これまで散々邪魔してくれたお礼におれは爆弾発言をしてやつた。

「オイオイ、周りの奴ら聞いてるんだぞ。」

隆史の奴は相当焦つているらしくそつと俺に耳打ちしてきた。周りの奴らは俺たちの会話が聞けないとさつそく入手した情報を議論し始めた。またたく間に騒がしくなり、体育教師の今井が怒り出した。

「コラ。何してる。ちゃんと準備運動をやれ！－！」

俺はその効果に満足し、ストレッチに移った。隆史の奴は恨めしげに俺を見つめている。

ストレッヂも無事終わり、高跳びの準備をしている間にクラスの連中が隆史に聞こえないように俺に声を掛けってきた。

「さつきお前ら言つてた、齊藤の本命つて誰だよ？」

「ふふふ。予想通り。

「それは秘密だ。本人から聞けよ。下手に言つたら俺の命がないからな。」

隆史を怒らせたら誰の手にも負えない。美青年の半面といつものだろうか？それとも幼い頃から嫉妬でケンカを売つてくる奴らを相手に鍛えたのか詳細は知らないのだが、隆史の奴は県下屈指の危険な男としてその名が知られていたりする。

「俺らが聞いたら絶対にやられるつて。親友のお前から聞きたいんだよ。」

「お～い隆史！今泉が話あるつてやー。」いまいずみ

手に負えなくなつた俺は今泉を売ることにした。

「話つてなんだ？」

少々機嫌が悪いようだ。下手に刺激して怒らせても俺は知らないからな。

「さつきの話がちょっと聞こえちやつてや。」

戦々恐々と今泉が話し出す。

「ほつほつ、それで？」

対する隆史の目はだんだん凶暴な鬼の目になリつつあった。

「小谷と西城さんはどこまでいったのかなって？」

苦し紛れの言い訳！－「ラア、今泉。逃げるんじゃねえ。

「なんだそんなことか。キスもしてないらしいぜ。安心しろ。お前つて確かに西城さんのファンなんだろう？そりや、気になるわな。てか、直接陽介に聞くつて大胆なことするんだな。」

あり得るはずもない解釈をしている隆史。俺は少々呆れてしまった。

普通に考えて俺がそんなことでお前を呼ぶはずが無いだろ？

「ふ～。良かった。一安心したよ。」

これ以上隆史と関わり合いたくないらしく、今泉はそそくさとビリ

かに行つてしまつた。

「みんなの注目の的だな。そろそろ前のファンが泣き始める頃じやないのか？」

悪戯つぽく隆史の奴がいつてくる。

「あんまりそんなこと言つてるとうつかり今泉に如月のことを言つね。

」

「こは少しばかり釘を打つておいた方がいいだり。

「すいません。」

からかつのはこの位にしておくとするか。アイツも心配してくれていたみたいだしな。

本音トーク

まちにまつた土曜日。今日は邪魔者（隆史）がいないので幾分か気が楽だ。

で、俺は何をしているかというと……興奮のあまり駅に早く着きすぎて西城を待っている。男として遅刻は許されないからな。（言い訳）

「陽介、早いんだね。」

西城は白で統一された服を着てきた。何着ても可愛いんだな。

「ちょっと楽しみでさ。」

苦笑いでじまかしておく。

「電車乗ろうよ。」

西城はお構いなし改札へ向かう。少し落ち込む俺。そんだけ西城が楽しみにしてるって事かな。

「ちょっと待てよ。」

小走りで西城に追いついた。ホームまで行くも、いざ何を話したらいいのか全く見当もつかない。

「H/Mちゃん新曲の『believe my love』歌つてくれるかな？」

「歌うでしょ。最近出たばかりだからあまりレパートリーもなさそうだし。」

「おお。陽介、なかなか鋭いな。」

「そんなこと無いって。」

西城に褒められた俺は照れてしまった。

「陽介？」

「ん？」

「なんか楽しそうだね。」

そりやあ、西城さん。好きな女と一緒にライブに行くんだから最高に幸せでしょ。しかも邪魔者のいない初デートだし。

「西城と二人つきりだからね。」

思わず俺はにやけてしまった。

「そうだよね。前は如月さんとかいたもんね。そうだ、そうだ。陽介と如月さんって昔付き合ってたことがあるの？」

いきなりそんなこと言われましたも…。あ～『キアキア』した。

「幼稚園の頃からの幼馴染みなんだ。如月はあんな性格だからあんまり周りに反対がいるよ、って。その反対がどう思っても、彼女は

まり周りは友達がいたくてさ、その反対を幼稚園時代の呼び名で呼んでるんだよ。

「へえ、なんだ…。ようかやんは如月さんのことなんて呼んでいたの？」

「え。二つねの。」

『西城に』『ようちせん』って呼ばれた。
『よしちせん』って呼ばれた。
！－今日は寝れないだらうな。

「教えてよお～」

わいせん

なにをそこまで笑わなくて。かなり恥ずかしかったんだぞ！（泣

「私もよしあやんって呼んでもいい?」

「なんでも……結構恥ずかしいんだぞ。」
「多分ね、多分なんだなあ。如月さん、」「

思つんだ。」

如月が俺のこと好きだって？？？

西城さん、それって何かの間違いですよ。

俺たち幼馴染みでことで他には何の共通点もないし……それに如月は作家目指してるし。

「カンチガイダト、オモイマス。」

はい、しつかり動搖しちゃつてる俺。西城にバレバレだな。

「ブツ。」

西城に噴かれた、西城に噴かれたよ。そんなに笑わなくつても。
こつちは結構ショックだつたんだぞ。

「な、なあ西城。本当にそう思うのか？」

「うん……アハハ……。ふう、落ち着いた。だつて早紀つてずう
つと陽介のこと見てたよ。私とちょっといちゃいちゃしてたらすつ
ごい目で見てきたし。でも早紀には陽介のこと渡さないもんね
うう……西城……。俺、感激したよ。」

「西城ありがとう。」

駅が近づいてきたので、それつきりこの話はすることがなかつたけ
ど、西城の思いを始めて聞けてかなり嬉しかつた。
でも如月これから上手く友達として付き合つていけるかどうか、
不安だ。

ライヴ

b e l i e v e m y l o v e

私はあなたへの 思いを信じている
気づくのが遅かつたけれど 辛いこといつぱいしたけど
あなたは私に 振り向いてくれるだらうか

会場には多数のファンが詰めかけ、ほぼ満員。今は遠坂の新曲を生でお披露目中。

俺はあんまり遠坂の歌が好きじゃないんだけど（つていうか名前だけしか知らないし）この曲は気に入った。トップアイドルつていうんで結構ファンシーな曲も多かったんだけどこういうラブソングだったら結構好きだな。西城とのトークを盛り上げてくれそうだし。

この思いを あなたに
伝えることが 出来たなら
自然と脈打つ 私の愛が
あなたを包み込むでしょう

サビの部分で西城が俺にこいつと声を掛けってきた。

「HIIIちゃんってあんなに身長低かつたっけ？」

西城に言われてみるとテレビで見るよつか、身長が低い。所詮テレビなんだろう。

「ちよっと低いような気もするけど…。俺たちと同期だったりして。

「周りのファンから睨まれたので俺は黙ることにした。

b e l i e v e m y l o v e

この愛が永遠でありますよつこ

歌が終わると万雷の拍手。このライブ一番大きな拍手だった。

「ありがとうございます。始めてのラブソングだったのでトチつちやつた所もあつたんですけど、どうでしたか？」

遠坂の問いにファンが口々に絶賛し始めた。

「気に入つて貰えて良かったです。だけど、残すところ後1曲になつてしましました。皆さんとのお別れは非常に寂しいのですが、仕方ありません。いつもの曲でお別れしましょう！」

そう言つてデビュー曲を熱唱しながら、通路を歩き始めた。俺たちの立ち位置がたまたまその通路脇だったので、後ろから押してくるファン達の餌食になつてしまい。かなり苦しかった。（おかげで西城と密着できただけ。ウヒヒ）

遠坂を触ろうと通路にはファン達の手で溢れかえつていった。遠坂は若干イヤそうな顔をしたが、すぐさま営業スマイル（？）に変わつて速く切り抜けようとしているのが目に見えた。

俺たちの横を通つた時にふと俺と目があつた様な気がしたが、何事もなかつたように通り過ぎ、ドアから消えてしまった。

「本日はございました。全課程が修了致しましたので…。」

退場を促すアナウンス。ドアに近い方から係員が鉄柵（…）を外し、俺たちが出れるようにした。

「新曲よかつたね。今度シングル借りようかな？」

「始めて聞いたけど、違つた曲風もなかなかいいね。ますます人気に拍車がかかると思うよ。」

「今度また一緒に行こうね。」

「今度は俺がチケット用意するよ。」

「でも取りにくいでしょう。高いし。無理しなくともいいよ。げ…、

外雨だし…。仕方ないか、傘買つてくるね。」

西城は近くの売店に傘を買いにいつてしまつた。

俺、折りたたみ持つてゐるのに…。今更西城の厚意を無駄に出来ないし…。

ふと周りを見回すと、女の子が困つたよつとしていたので俺はその子に傘を上げることにした。西城に持つてることバレたら後々、気まずいしね。

「傘ないんだろ?」これ使えよ。」

「え…、でもそんな…。」

いきなり見知らぬ男に傘使えって言われても焦るわな。普通の反応。「大丈夫だつて。んじゃ、俺はいくから。」

半ば強引に彼女に傘を渡すと俺はそそくさとさつきの場所に戻つた。と、なんと実にタイミングの良いことだらう。西城が傘を2本買つてくれた。

「はい。サイズ分からなかつたから取りあえず一番大きなのを買つてきたから。」

「ありがと。んで、いくらだつた?」

「そんなのいいよ。プレゼント。」

ん~。男として好きな女に金を出させるのはな…。そのかわり貢ぐ氣も全くないけど。のちのちお礼になんかあげなくちゃ。

「ありがたく受け取つておくよ。電車乗り遅れたら面倒だから、行こうか。」

俺はこの時、強引に傘を渡した彼女の視線に気づいていなかつた。

魔女の木田（前書き）

1000ヒット記念の特別編です。
キリ番（）とに特別編を書いていきたいと思います。

隆史の休日

今日は日曜日。清々しい朝だ。

「隆史様、お目覚めになられましたでしょうか？」

メイドの小雪さんがいつも起こしに来てくれる。え？メイドだつて？ああ、そうか。俺の親父は齊藤財閥の会長をやってて、世間一般に言う金持ちの部類に入る。屋敷もまあまあの広さだから家族で管理仕切れなくて、メイドを雇つてゐつてワケ。

「起きたよ。いつもありがとう。」

「お気遣いありがとうございます。朝食は旦那様と一緒に緒されますか？」

「部屋でとるよ。」

「分かりました。少々お待ちください。」

実は俺と親父、結構仲が悪かつたりしている。なぜかつて言うと、金持ち同士の策略結婚に付き合わされるのが嫌で許嫁を破棄したから。『お前は齊藤財閥を次いで貰わなければならんのに、どうして父親が決めた嫁ではならんのだ！！跡取りとしての自覚がたらん！』陽子さん以外の嫁は一切認めんからな！！』らしい…。

そんなどうでもいいことは置いといて、せつと着替えを済ませて携帯をチェック。如月さんからメール届いてないかな～

Eメール13件

なんか嫌な予感するけど…。

”隆史、今日デートしよー！”

速攻、削除。陽子からのくだらないメール。見る価値もない。

”如月さん。今日暇？良かつたら遊ばない？”
11時だし、さすがに起きてるでしょ。

「お持ち致しました。」

小雪さんがカートに朝食をのせて運んできてくれた。そういう、俺が陽子を嫌う理由の一つとしてメイドさん達をバカにすることだ。彼女達のおかげで俺たちが生活していくのにアイツはそれを当然のように受け止め、見下してさえいるのだ。そんな女とは一切関わりたくないのが本音である。

「そのままでいいから。もう下がつて良じよ。」

小雪さんがテーブルに朝食を並べようとするのを俺は止めた。カートにある奴を取れば済むんだからわざわざ並べるよりつな無駄な労力は使って欲しくない。

「ですが…。」

「いいから、いいから。他に仕事あるんでしょ？」

「ありがとうございます。」厚意に甘えさせて頂きます。」

小雪さんは一礼して部屋から出て行つた。

朝食を食べ終えたらドコに遊びに行こうかな?

You got mail!!

厳ついオッサンの声でメールの着信を知らせる携帯。

” ようちゅんも一緒になさいよ。 ”

” あいつ今日西城さんとデートだよ。 ”

” あ、そつか。何するの? ”

” 特に決めてないけど…。ドコ行きたい? ”

” 本屋さん ”

いや、本屋つて…。そりや、作家田描してるんだから分からぬとも無いけれど…。

” OK、OK。それじゃ、迎えに行くから待つてて ”

” はーい ”

そういうえば、如月さんが俺と一緒にドコか行くのって初めてだよな。でも、本屋でデートつて…、ま、一人で行けるだけマシか…。

俺は素早く身支度を済ませ、カートを厨房まで運び、全速力で如月の家に向かった。

「お待たせ。」

如月は玄関前で待つててくれたみたいだ。

「早かつたね。」

「普通だろ？んじゃ、早速本屋行くか。」

俺が若干てんぱってるのを気付かれないように足早に本屋へと向かつた。

俺が案内したのは、この地域じゃ一番大きな本屋で立ち読みOKの店だ。うちの系列なんだけど』

如月は目をキラキラさせて書棚に飛び込んでいった。

「上のカフェにいるから。」

こういうときは一人の世界にさせた方が良い。名残惜しいがカフェでくつろぐことにした。

冬の空、暖房の効いた暖かな部屋にいるとウトウトしていつの間にか眠つてしまつたみたいだ。如月が揺すつて起こしてくれた。

「悪い。ついねちまつて。」

「ごめんね。私もつい夢中になっちゃつて。」

申し訳なさそうにする顔に俺はついつい赤面してしまつた。

「顔赤いよ。風邪でもひいちゃつた？」

「大丈夫、大丈夫。」

俺はそつといつものポーカーフェイスに戻り取り繕つた。

「ならないけど…。そろそろ帰ろうか。」

時計を見ると7時をすぎていた。俺どんだけ寝てたんだよ。思わず苦笑してしまつた。

「そうだな。帰ろうか。」

如月を家まで送り、屋敷へ戻る道すがら携帯が鳴った。

”今日はありがとう”

なんにも楽しめなかつたけど、如月が喜んでくれているみたいだからよしとしようか。

進路

西城とのたのしかったライブも終わり、寒風すむむー2月。我ら中3は入試前、試験勉強踏まえ進路相談をすることになり、俺たちは図書室へいっていた。

「ようちやん、ここ間違ってるよ。」

すかさず如月が訂正する。如月あなどれん。

「如月つてどこの高校行くんだ?」

「ようちやんは?」

「俺は泉ヶ丘にいくつもりだけど。」

「そつかあ…。んじゃ私もようちやんと同じにするね。」

「俺より出来るんだからもつと上の高校行けばいいのに…。」

「そうだよ。俺と同じ清陵にすればいいじゃん。」

横から唐突に隆史が口を挟む。以前はウザイの一言であつたが、前回西城に言われてから妙に如月を意識してしまっているので、隆史は救世主のように思われた。

「清陵つて齊藤くん頭いいんだ。」

今気づいたかのように言つ如月。そりや学年一位の才女からしたら俺たちなんか…。

「え…、一応俺学年5位なんだけ…。」

如月に少しでもアピールうど、必死に勉強した隆史君。上位になればそれなりに目に付きやすいので覚えて貰えると思っていたのだ。
「ごめん。全然気づかなかつた。そつか学年5位か。だつたら清陵なんか楽勝だね。」

二人が盛り上がりしているスキに俺は西城と話をしようじゃないか!—

「西城はどうにいくの?」

「敬愛だよ。」

え…。

俺は固まってしまった。西城と同じ高校に行こうと思っていたのに
なんと西城は女子校にいくと言つのだ…！

「そつか…、敬愛か…。合ひ機会が少なくなつちやうね。」

「そうだね。でも、メールとか電話とかできるじゃん。それに女子
校なんだから他の男に惚れることなんかないよ。」

どうやら西城は気を使つて言つてくれたらしげ、俺には『他の男
といふ言葉が銃弾の』とく心臓に突き刺さつた。

「そうだよな。女子校なんだからな。杞憂だったよ。」

笑いながら「まかしても心の隅にあるモヤモヤは消えなかつた。

「ん、どうしたんだ？」

隆史が落ち込んでいる俺に気を利かせて話しかけてくれた。

「西城は敬愛に行くんだってさ。同じ高校行こうと思つてたから結
構ショックで。」

西城には聞こえないように隆史に耳打ちした。

「そつか。でも女子校なんだからそんなに心配することないだろ？」

「西城も同じ事言つてたけど、なんかモヤモヤした物が消えなくて
や。」

「心配しすぎだつて。西城だつてお前のこと好きなんだから気にす
ること無こと。」

「うつ…。持つべきは親友と上手く言つたのもだ。」

今日はこれでお開きになつたが正直なところ俺の不安はぬぐえなか
つた。

月日が経つのも早いものだ。

気がつけばもう2月。入試シーズン真っただ中。

俺は如月と隆史の3人で泉ヶ丘に受けに行つた。俺はさほど成績が悪く無いのでなんとか全部書くことが出来た。あとは結果を待つのみ。

「簡単だつたぜ。」

隆史はとつてつけたような嫌みを俺に向かつて言う。

「清陵いけよ、清陵。学年1位のお前がこんな学校受けるのがそもそもの間違いなんだよ。」

「親友と一緒にやなきや、高校生活もエンジョイできないだろ?」「何が親友だ。如月のことが好きで如月と一緒に高校に行きたかったくせに。」

「ホントのこと如月に行つても良いのか?」「

嫌みを言つ奴には弱みで反撃だ。我ながら良い作戦だと思つ。

「ちょ……。それだけは勘弁して下さい。」

ふ。勝つたw

「さつきから何話してるの?」

校門付近で話し込んでいたから如月が来たことに全く気付かなかつた。あぶねえ、あぶねえ。

「テストのことだ。」

とつてつけたような笑顔で返す隆史。つづむ、さすがのこいつでも動搖したと見える。

「そつか。難しかったもんね。」

そんな笑顔でいわれましても…、正直私には難しかつたです、ハイ。

「簡単、簡単。ま、ここにひとり頭抱えてる奴がいるけどな。」

そつと俺を見つめてくる隆史。ウヌヌ、許さん…！

「ようちやん、大変だつたんだ。てかさ、なんでここ選んだの？」

「俺が行ける高校じや、ここしか軽音部が無かつたんだ。仕方なくここにしたつてワケ。」

「そつかようちやんギター引けるもんね。齊藤くんも確か、ドラムできたんじやなかつたっけ？」

「ああ。俺と陽介は音楽で仲良くなつたみたいなもんだからな。あの当時で俺のリズムについて来れたのはコイツ一人だけだったからな。」

「もういいって、早く帰ろうぜ。」

正直昔の話をされるのは恥ずかしい。それにいつまでも校門で立ち話つて言つのもなんだしな。

「なあ～に恥ずかしがつてんだよ、お前。話させたくないんだらうけど、歩きながらでも俺は話すからな。えつと、続きなんだけど、

如月は「コイツのギター テク知つてるよね？」

「知つてるよ、幼稚園からずう～と一緒だから。」

ああ、そういう言い方するのはやめてくれ。隆史はお前のこと好きなんだぞ。でも、お前は俺のこと好きらし～し…。どうして周りの奴はこんなに悩ませるんだよ！…（怒

「そつだつたね。で、俺はドラム昔からやつてたんだけど、中学で吹奏楽に入つて腕を立たせようとしたんじや。周りの奴が下手すぎて、曲に俺のドラムが合わなかつたんだ。で、結局は吹奏楽やめることになつたんだけど…。それはさて置きやめてからちよつとしたら部員の奴が俺の所に来てや、俺に合づギターを弾く奴がいるつて言いに来たんだ。」

「それがようちやんつてワケだ。」

「大正解。それで早速コイツの教室に行つて聞かせてもらつたんだけど、正直驚いたね。この年でこれだけの腕を持つ奴がいるのかつて。で、そのあとセッションしてみたら今度は俺の方が置いて行かれてね。家に帰つて必至で練習して今では同じレベルでセッション出来るようになったけど。あのころが一番楽しかつたよな。」

なんでいきなり俺に振るんだよ（怒）

「俺、軽音部に入るけどお前はどうするんだ？」

「お前と合つよつの奴はそりそりないだろ。仕方ないから俺も入

つてやるよ。」

「二人とも結局は青春してるんだね。」

「そういうえば如月つて何部にはいるんだ？」

「作家志望だから文芸部じゃないのか？」

「ようちやん大正解 文芸部だよ。」

「そういうえば如月の本見たこと無いな。お前は見たことあるか？」

「俺もないな。いつも書いてるけどあれってどうじてるんだ？」

「あれはね、私のホムペに掲載してるんだよ。」

「へえ～、アド教えて。」

おお、隆史。如月の作品読んで話題増やそうって魂胆だなー。その調子で如月の気持ちを俺からお前に向けさせてくれーー！俺は応援してるからな！！！」

「やだよお。恥ずかしいもん。」

「お前も何とか言ってくれよ。如月の本読めないじゃん。」

「本人が嫌がってるんだから仕方がないんじゃないかな。」

「さてはお前アド知つて教えないつていうんじゃないだろうな。」

「いや……ホントに読んだことも、サイトに行つたこともないし……」

「え…。ようちやんホント？」

しまったあああああーーー感想聞かせてつて言われてたんだああああ

！—墓穴ほつちまつた。

「何？しつてんのか？教えるおおおおおーー！」

そのあと隆史の奴に首を絞められてあやふやになつたが意識が薄れる前に悲しそうな顔をする如月が見えた。

結果発表

ついに合格通知が家に届いた。

俺は一抹の不安を抱きながらも、と封を切った。なにしあやけに薄かつたから。

通知
小谷 陽介様

あなたは本校の入学試験において優秀な成績を修め、合格したことをお通知致します。

期日までに本校窓口にて……（以下略）

「はい？え…。合格？紙切れ一枚しかないのに？あ、でも手続きしきつて書いてあるな。やつたぜええええ…！神様ありがとう…！菅原道真ありがとう…！」

俺はニヤケ顔で登校した。好都合なことに今日が卒業式。内の学校やけに早いんだよな。

「陽介どうだつた？え？俺か？ふ、愚問だな。もちろん合格だ！せ。」
なに自演してんだよ。ホントお前といふと疲れるわ。

「合格したよ。」

「え？マジ？本気でいつてんの？お前が受かった？」

「こ…こ…いつ…。殴り殺してやるつか…。（怒）

「よつちゃんお早う。通知届いてたよ、見た？」

「こいつ受かつてたらしい。地震がなんか起ころがもな。」

「そんなに俺が受かつたことにどろいてやんのか。」

「よかつたじやん…！私も受かつてたよ。んじゃ、学校終わったら手続きしに行こう…。」

あ～西城無事に敬愛受かつてるかな？心配だな。敬愛以外受けてないしな。あんな必死な西城初めてみたよ。でも可愛かつたな。

一人でデレデレしてたら、いつの間にか学校についていた。

周りをキヨロキヨロ見渡すと案の定、西城の周りには男子が群がつていた。見つけやすくて楽なんだけど、なんか…。

「西城？ちょっといい？」

声を掛けた瞬間今まで温かかった周りの目が一瞬にして殺氣を帯びた目に変わった。

「あ、陽介。今来たところ？」

「そりなんだけど…。ここじゃなんだから移動しない？」

う～ん。周りの男子が気になつて上手くいえないと。

典型的なパターン、体育館裏。

「西城、敬愛受かつた？」

「受かつたよ。これも陽介と初詣に行つたからだね。」

満面の笑みで言ってくれるけど、西城と離ればなれになつちまうなんて、俺にしたら大事件なんだけどな。

「俺も受かつたよ。これも西城と初詣に行つたからだね。」

俺は自分の不安を表情に出さないようにめい一杯努力した。正直なところ結構ショックで、泣きそうだつたんだけどな。なんか嫌な予感がして。

「卒業式始まっちゃうよ。教室に行かないよ。」

西城は言い残すと走つて言つてしまつた。俺はどうしても追いかけることが出来なくて、胸が詰まつて苦しくて。でも、別れるワケじやないから泣けなくて。しばらくたたずんで気持ちの整理をしたら教室にいくのが少し遅くなつてしまつた。

「ダメ」「行つてたんだよ。」

「ちょっとな。」

「ふ～ん。俺には関係ないから別にいいや。」

そう、詮索しないところが隆史のいい所なんだが…。

「ボーッとしてないでさつさと並べよ。正直邪魔だぜ。」

「言多い。いつか必ず葬り去りにやるーー（怒）

「つっせー。」

俺は隆史に向かつて出来る限りの殺氣を送りながら、しぶしぶ並ぶことにした。

涙の卒業式

『……3年間の課程を修了し卒業する者、1組 新井 晋司』

『はい！』

毎年見てきた卒業式。だけれど、いや、自分たちの卒業式だと思つて少し違つたように思える。そう、神聖な儀式のような。滞りなく卒業証書の授与は終わり、これも恒例の送る会。

各学年が歌を歌うところにこれまで典型的な儀式（？）を終え、俺たちの退場。

仰げば尊しなんて古くさい曲に涙を流しながら退場する、同期の奴ら。別に感傷的な気分にもならずシレッとした表情で退場した。隆史も面倒くさそうに歩いている。

教室に戻れば担任からの訓辞（？）があり、家庭・学校・生徒の三者一体で別れを惜しむどことの卒業式と変わらない光景なのだが、俺は以前嫌な予感がして感傷的な気持ちになれなかつた。

「陽介、ちょっといい？」

教室から出て、帰ろうとした俺を西城が呼び止めた。

「ん？」

西城が何か言いたそうにしていたのもつかの間。熱烈な西城ファンに取り囮まれてしまつた。

「後で連絡するから――――――！」

彼らに拉致られていくのを尻目に普段なら救出する俺はそのまま帰ることにした。

なんだか今、西城に触れてはならないような気がしたのだ。そう、恐れていたことが現実になつてしまつようで…。

その夜、部屋で死んだように沈んでいたら携帯が鳴り響いた。

西城からのメールだ。

”今から公園にこれる? ”

”いく”

公園に着くと既に西城はブランコに座っていた。

「何?」

俺の顔を見て西城は一気に言つた。

「もう、つき合えない。」

俺の予想が的中してしまった。

「なんで…。」

「初めに言つたじやん。『そんな田で見ないで。仕方がないからつき合つてあげるよ。』って。もひ、私たち中学生じゃないんだから今日で期限切れ。」

「じゃあ、今までのは…。」

「演技じゃないよ。恋愛感情はなかつたけど。多分私つて誰も一生好きになることないな。だから、私たちはおしまい。今までの事忘れて、ね? 恋人から友達にもどる。」

西城はそう言い残すと、帰つてしまつた。俺は追いかけることが出来ず、『騙してたのか!!』って怒ることも出来なかつた。全部予想してたことだつたから。

辛くて、悲しくて、胸が張り裂けそうで。俺は誰もいない公園の片隅で一人涙した。分かつていたのに、分かつていたのに。それでも俺は分からぬフリをして、分かぬうともせず、ただ偽りの思いだと信じてたのに。

嗚呼、実際に言われると辛いよな。

この世界がモノクロに見えて

なんの為に生きてるのか分からなくて

『つもれない』って言葉が耳から離れなくて

神様は残酷だよ。

慰め

『元気ないな、なんかあつたのか?』

『西城と別れた。』

『なんで?』

『西城がもう、つき合えないって。仕方なしにつき合ってあげてたんだって。誰も一生好きになることなんてないって。』

『そつか…。大変だつたんだな。』

『…』

『どうせ、暇なんだから明日俺の家に来いよ。』

『そんな気分じゃない。』

『いつまでも落ち込んでたつて仕方ないじやないか。』

『だけど…だけど…』

『だけど何だよ?うすうす氣づいてたんじやないのか?』

『…』

『覚悟出来てたつて辛いよな。』

『…』

『明日、朝迎えに行くから今日はゆっくり寝ろよ』

隆史は用件だけ伝え、俺の返事を聞こうともせずに切った。

『ツー…ツー…ツー…』

いつまでも聞こえるその音は、俺の胸に必要以上に響いて耐えきれなくなつて、携帯を閉じた。

いつの間に寝ていたんだろう。田が覚めると朝で、俺の田の前には隆史の顔があつた。

「朝からうぜえな。」

「人が心配して来てやつたのにそういう風にいうのかよ。」

「うるせえよ。てか、何勝手に俺の部屋に入つてんだよ。」

「叔母さんがイイつて言つてたぞ。」

「本人の許可を得るのが普通だろ。」

隆史の抗議の声を無視してさつさと着替え始めた。

「… やつさと顔洗えよ。最悪だぜ。」

「マジで？」

「目なんか充血してるし。こりや、化けモンだぜ。」

「つるせえ。顔洗ってるからおとなしく座つてひ。」

洗面台の鏡を見て驚いた俺、確かに化けモンだ。ひでえ顔。目尻とかをマッサージしながら念入りに顔を洗つた。さつきよりかはだ大分ましになつたな。

「おい、コラ。なにいじつてんだよ。」

部屋に戻る隆史の奴が引き出しの中を物色していた。「エロ本の一冊でもあるのかなあーなんて。」

言い訳だつ事がすぐに分かつた。西城に関係する物でも探してたんだろう。ま、全部捨てたけどな。今では苦い思い出つてことじしてゐる。

「んなもんねえよ。ほら行くぞ。」

俺は強引に隆史を引っ張つて、家からでた。

「お前が車なんて珍しいな。」

「一人でゆっくり話したかったからな。」

そこには黒塗りのベンツが停めてあつた。

「乗れよ。行くぞ。」

半ば強引に俺を乗せ、隆史は運転手に合図した。

「思つたより元気そうだな。」

「ガラにもないこと言つなよ。」

「もつと沈んでるかと思つてたんだかな。初めて好きになつた相手だつたんだろ？」

「…、何もかもお見通しか。」

「……。」

「でもな、俺の恋いも叶いそうにないんだよな。」

「なんで？」

俺は驚いた。

初めて弱音を吐いたのだ。

「如月はどうもお前の事が好きみたいでな。俺がどんなに振り返つて貰おうとしても、お前しか目にはないみたいだからな。」

「そうか…。気付いてたのか。」

「まあな。」

「……。」

「……。」

「お前…、辛くないのか？」

「そりや、辛いよ。どんなに呑くしても絶対振り向いてくれないんだからな。」

「強いな、お前。俺もそんな強さが欲しいよ。」

「俺よりお前の方が強いだろ。俺なんか振られたりしたら生きて行けそうにない。」

「でも、生きてたらいつかチャンスが巡って来るかも知れないだろ。」

「それもそうだな。」

なんだかんだ言って、隆史の奴は俺のこと心配していくくれたんだな。どうせ、アイツのことだからセッションの誘いだろ。今日は久しぶりに本氣で弾いてみるか。

入学式

隆史のおかげで何とか立ち直れることができた。あの時アイツが手を差し伸べてくれなかつたら、今頃俺は…。

「入学式早々から大変だな、お前。」

女子に囲まれている隆史に向かつて俺は冷笑してやつた。

「おま…。自分じゃないからつてふざけやがつて。」

「羨ましいぜ、全く。俺もそんなにモテたらしいんだかな。」

「おい、待て！置いて行く気か！…」

俺は隆史を放つておいてさつさと教室に向かうことにして。今更爺臭いって言われるかも知れないけど、あの時、俺が一番輝いてた時期なんだろうな…。つと良い思い出にしておくつて決めたんだつた。教室をざつと見回すと既に何人か親しそうに話していた。何にも変わらない普通の光景。

「ふう…。苦労したぜ。お前後で覚えとけよ。」

しばらくして全力疾走した後のようない荒い息で俺の隣に座る。おい、出席番号順だろ。てか、教室中の女子全員、隆史の事LOCOOZしてゐるし。モテる男は大変だね。

「大変だな。ま、俺には関係無いんだけどね。」

「人ごじどと思つていい気になりやがつて。」

「実際人じじさん。」

「う…。」

勝つたぜ。W

「で、部活じづくなんだよ。お前ドラマやりたかったんじゃなかつたつけ？」

「まあ…。そうだけど…。お前は？」

「俺は入らないよ。面倒だし。」

「じゃ、俺もやめとく。お前じゃないと合わないし。またやめるこ

となるだけだし。」

俺たちがべらべら話している間に担任らしき先生が入ってきた。
「これから一年間担任をする篠山ささやまだ。手始めに自己紹介してもう
か。」

チツ、面倒くせ。適当に言つて流しとくか。

「小谷 陽介です。どうぞよろしく。」

シレッと済ませとくに限る。誰も聞いてないだらうしな。だけど隆
史の時は凄まじかった。女子の好奇の目にさらされ、男子の激しい
憎悪と嫉妬の目を向けられたんだからな。
もう慣れてるけどw

これからこの高校で色々あるんだろう。

中途半端な転校生

入学して一週間になる。

隆史はいつも女子に囲まれ、男子から睨まれている。アイツが俺に助けを求めるから、俺にも時々女子がきて

「齊藤君のメルアド教えてよ。」

と、かなり迷惑なことを言つてくる。教えたあもじろいことにはるんだろうけど、後からどんどん甘えてくるからこゝは冷たく「悪いけど、アイツから直接聞いてくんない？」

つて突き放す。そうすると大抵の奴はどつかいくんだけど、自分で可愛いとか思つてるナルな女とかはかなりしつこい。上目使いで言つてくるんだけど、そんなのに全く興味がないからスルー。ま、こんな感じが続いて俺たち一人、特に俺はクラスから浮いている。

「今日は転校生を一人紹介するぞ。」

篠山がいつになく上機嫌で朝のH.Rで告げた。

はあ？ 転校生だ？ この時期にここに来るつて事は前の高校でかなりヤバいことしたつてことだろ？ よく受け入れたな。どつかのボンボンか？

「入つてこい。」

入ってきたのは普通の女子。だけどクラスの奴らは雄叫びを上げていた。まあ、大抵の女子は全部隆史に持つて行かれてるから納得といえば納得。

「自己紹介して。」

篠山の奴、女子一人になにテレテレしてんだよ。キモイな。

「初めてまして。遠坂エミです。突然でビックリした方も多いため思いますが、仲良くして下さい。」

俺は呆れてつい、隆史に耳打ちしてしまった。

『なにアイツ？ナル？』

『は？お前気付いてないの？ナルとか言つたら他の男子に殺されるぜ。』

『なんで？実際ナルだろ？突然でビックリとか…。』

『遠坂エミだぜ。お前西城さんとライヴ行つただろ？』

『たんなる同姓同名だろ？てか、仮にアイドルだとしても興味ないし。』

隆史としゃべっていたのが目立つたんだろうか？遠坂は俺をじっと見つめていた。正直言つて気持ち悪い。

自己紹介も終わり、まだ出席番号順（つていつても隆史と交代した奴以外）で座つていたので一番後ろの席に座るようになっていた。

一週間もするとオリエンテーションとかで授業をやらないって言つわけでもなく、普通の授業を始めた。中学の時と何一つ変わらない暇な授業。興味ナシ。爆睡あるのみ！！

3時間ぶつ通しで寝続けた俺は、如月につつかれて起きた。

「よつちやん、寝過ぎ。」
「飯食へよ。」

あ～あ、もう昼休みか。寝ても腹は減るモノなんだな。

「外いくか。」

例によつて女子に囲まれてゐる隆史に気付かれないとして教室をでようとした。

「おい、待て！俺も行く。」

女子達を振り切つて隆史の奴は追いかけてきた。男子達は遠坂を包围してゐるから、教室はガランとしている。邪魔なのはイスと机だけだ。

「女子連中がウザイから屋上いこうぜ。」

隆史の奴は強引に如月を引っ張つていく。

「屋上つて閉鎖されてなかつたけ？」

「合鍵持つてるから問題ナシ。」

いつの間に合い鍵なんて作つたんだよ。それはあとでじっくり聞こ

うか。俺も欲しいし。

屋上は眺めが良かつた。誰もいない3人だけの昼飯。如月も隆史も嬉しそうだ。

「ようちゃん、元に戻っちゃつたね。」

いきなり言われてビックリした。元に戻つたつて何？

「はい？」

「だつて西城さんと付き合つてた頃はすつごく優しかったよ。心の窓も開いてたし。普段見せない表情とかしてたし。」

気付いてたんだな如月。

「そうか…。俺って変わつてたんだ。全く気付かなかつたな。」「俺は気付いてたぜ。」

「え？」

「トゲトゲしく無かつたしや。話しても別人かとおもつちまつたぞ。」

「恋は盲田つてよく行つたもんだな。全く気付いていなかつたよ。」

「寂しそうだよ。ようちゃん。」

またしても如月の言葉に驚いた。

「昔はそんなこと無かつたのに。」

昔…昔は…そうだな。俺には昔ギターつていつ熱中することがあつたんだな。それを生きがいにしてたような気がする。今は…

「今からでも遅くない。軽音部に入ろうぜ。」

「そうだよ。私が歌詞書くからようちゃんと齊藤君で曲創つて歌つてよ。」

ん~…。ま、何もしないよりマシか。

「そうだな。入るか。」

生きがいを見つけて、モノクロの世界が色を持つようになった気がする。

だいたい部活が決まって活動始めてる時期に、俺たちは輕音部の顧問に頭を下げて入れて貰うこととした。

「もうちょっと入るのが早かつたらバンド組めたのに。全員メンバーが決まってるから悪いけど、お前ら一人でバンド組んで貰えない？」

傲慢そうな部長だ。ま、俺ら一人つてのは昔つから決まってたことなんだけど…。

「構いませんよ。中途半端な時期に来た俺らが悪いんですか？」「俺が一応、一応部長に謝罪しとく。仮にも部長なんだし。

「おやおや、部長。可哀想じやありませんか。ループ×ループのベースの僕が口にいふと知つて入つてきたに違いないんですから。『そりでしじゅう？』とでも言いたげな目で俺たちを見てきた。誰だコイツ？」

「羽柴、それはないと思つけど…。」

あの傲慢そうな部長が遠慮してる？ ますますわからん。

『お前興味ないから知らないと思うけど、人気グループのベースしてるんだぜ。こんなナルだとは思わなかつたけど。』

隆史が気を遣つて耳打ちしてくれた。

「僕に憧れて入つてきても楽器が弾けないと、話にすらならないからね。ちょっと弾いてみてくれる？」「う…、ムカツク。

俺は隆史に目で合図を送つた。隆史もそりづつムカツイているようだ。

1 , 2 , 3)

俺たちが初めてセッションした曲を弾いた。

隆史の雷鳴の様なドラマ。

俺の嵐のように豪快でかつ、纖細なギター。

2つは混ざり合い、溶け合い、一つの綺麗なメロディーとして収束した。

ほんの5分のセッションだが、周りで練習していた他の部員はいつの間にか聞き入っていたようだ。

驚愕の表情。羽柴とかいうムカツク野郎も唖然として見ている。そして万雷の拍手をしたのは軽音部の顧問の中杉。

「100年に一人の逸材だね。一人とも素晴らしいよ。」

「ありがとうございます。」

ここは素直に礼を言つに限る。ややこしいことになるだらうからな。つてか中杉何もんだよ。

「あ、じゃ、二人とも練習頑張って下さいね。」

そそくさと逃げる羽柴。さつきまでの自信は何処に。見てて気分がいいがな。

「楽器の方は問題ないみたいだな。うちの文化祭夏にやるからその時が俺たちの見せ場。それまでしっかりと練習してくれ。」

部長もさつきまでの傲慢さは何処に。これも見てて気分がいい。

「二人でなにかと大変だと思うからアシスタンントを付けるよ。山口さん、来て。」

隅のほうで機器をいじっていた女の子がこっちに来た。

「山口さん。さつき入部した二人。さつきの演奏聞いてたでしょ。二人の専属アシstantして貰えるかな?」

「はい、分かりました。えっと…、1年3組の山口 優香です。よろしくお願ひします。」

「俺はギターの小谷 陽介。こつちはドラムの齊藤 隆史。」「よろしく。」

隆史の奴愛想笑いしゃがつた。多分この女落ちたな。

「私、齊藤くん知ってるよ。女子の間では超イケメンが来たつてかなりの噂になつてたから。」

「ありがとう。」

「まだ、機器のメンテ終わってないから、またね。」

マイペースな奴、という評価をおれは山口にした。

「隆史、惚れたか？」

「冗談。俺は如月一筋だ。」

「結構なことで。」

俺たちはその後、「これからのこと」を話しながら帰宅した。

歌詞決定

軽音部に入部してはや1週間がたつた。

いつの間にか俺たちのテク(?)は尾ひれがついて学校中に知れ渡り、隆史ファンが急増。昼は屋上へ避難せざる終えなくなつた。クラスの俺に対する姿勢も変わり馴染み始めた今日のこの日の頃。

「相変わらず男子共は遠坂一筋だな。」

俺は呆れたように隆史にささやいた。

「女子も遠坂の所へ行つてくれたら俺は言つことないのに……。」

「みんなお前の本性を知らないからだろ。」

おれは悪戯っぽく笑う。

「それを言うな。それを」

やっぱ熱中することがあれば男は輝くんだな。以前より笑うことが増えた気がする。

「気づいてるか?授業中とか遠坂ずっとお前のこと見てるんだぜ?」

「は?なんで俺?隆史の勘違いだろ?席、隣通しだからそう思うだけであつて……。」

「それがな、移動教室の時も必ずお前の後ろについて歩いてるんだ。この前なんか声掛けようとしたんだと思うんだけど、男子連中に邪魔されたみたいでさ。すっごく切なそうな顔してたぜ。」

「俺なんか落としたかな?今度遠坂に聞いてみるわ。」

隆史の奴は意味ありげな笑みを向けてくる。なんか腹立つわ。

「で、如月に歌詞作つてもらうように頼んだのか?」

「ああ、そうだった。忘れてた。最近如月、文芸部の方で忙しいみたいでさ。どつかの雑誌のコンクールに出品するつて言つてた。」

「流行のアレか。大賞取つたら出版してくれるつて言つ奴だろ?出版社も小賢しいことするんだな。」

「そもそも生き残れないんだろう?仕方ないんじゃない?」

それでも出品したいって人もいるんだしわ。」

「そりだな。俺たちもバンドでそつまつのがあれば参加しているし。」

「人のこと言えねえじゃん。」

俺たちは放課後まで笑い合っていた。もちろん授業など聞く気なし。周りに迷惑掛けないように携帯のメールでやりとりしてた。

「お待たせ……」

部活を終わらせた如月が走つてくる。俺たちはいつも3人で帰ることにしてるんだ。

「小説の調子はどう?」

隆史の奴、点数稼ぎに入りやがった。俺はこの一人が付き合つ」とを望んでるんだがな。

「手直しの段階に入ったよ。もつ少しで出品できそう。」

嬉しそうに微笑む如月。熱中するものがあれば男のみならず人間輝くんだな。

「で、ようちやん歌詞書かなくてもいいの?」

いきなり本題を振られた俺はドキッとしてしまった。

「あ・ああ。その事なんだけど、頼もうと思つてたんだけどさ。最近忙しそうなんで落ち着いてからと思つて……」

ヤベエ動搖しまくり。言い訳っぽい感じになつてるし(汗、汗

「そりなんだ。エヘヘ、実はもう書いてたんだ。」

そういうつて如月は鞄から一枚のルーズリーフを取り出した。

「文化祭ようなんでしょう?季節が夏だからこんな感じでいいかなって?」

サンシャイン0194

煌めく太陽
立ち上る陽炎
そう夏真つ盛り

気温が高くて

暑苦しいけど 息苦しいけど

行ひづぜ 夏祭り

The summer festival

夜空に輝く花火

太陽のごとく光 照らす

哀愁漂わせる僕らを一掃する

夏の風物詩

恋人達の物語

全てはこの時のために…

輝くファンタジスタ

夢のような夏を超えて また一つ思い出を創るんだ

未来に続く夏物語り

また来年も創れるかな?

叶わない儚い恋も

叶わない儚い夢も

叶わない儚い明日も

ボクらが変えて行くよ

その思いでは永遠の詩となり 少年達の記憶に
刻まれる

永遠に〜

またこの場所できつと会おう

「おお、さすが如月。 イイ歌詞書くじゅん。」

俺は如月の文章力に改めて脱帽した。俺たちだけじゃありといんな
いい歌詞は掛けなかつたはずだからな。

「久々に腕がなるぜ。」

隆史も上機嫌だ。あと数個歌うつもりだけど、それは俺たちで考
えるとするか。

新メンバー？

歌詞も決まったことだし俺たちは順調に練習を続けていた。もちろん歌詞作りにも余念がない。

青春の一页

おつとそつそう。遠坂に落とし物のこと聞かないとな。今、教室の中で一人つきりだし声掛けてみるか

「遠坂？俺なんか落としてたっけ？」

「え？」

ま、当然の反応だわな。

「いや、隆史の奴、遠坂が俺に話したそつそして言つんで。
ちゅうじ、歌詞書いた紙無くした所だしね。」

「歌詞については知らないけど…。傘なり…。」

「傘？」

入学してから一度も雨なんて降つていないので傘なんか落とすはずがない。俺は遠坂が別の意味で心配になつてきた。中途半端な時期に転校してきたのも分かつたような気がする。

「うん…。」

「そう言われてもねえ。雨降つたことないじゃん。大丈夫？」

「そうじやなくて、私のライブ見に来てくれた日に…。」

ああ～そう言えば女の子に傘あげたよつな…。え？ちょっと待て。なんで遠坂が持つてんの？

「あれつて遠坂だつたけ？」

「うん…。」

恥ずかしそうにうつむく遠坂。トップアイドルなのにこんな事ぐらいで恥ずかしがるなよ。

「そつか。ありがとうな。」

俺は礼を言つて傘を受け取つた。ずっと傘返したかったんだらう。

「小谷くんつて軽音楽部なんだよね？」

「そうだよ。俺と隆史の2人だけ。人数全然足りないから俺がボーカルすることになつてさ。部長達の視線もやけに冷たいし。」

「よければ、私がボーカルしようつか？」

「はい？ 今なんと？」

例によつて恥ずかしそうにうつむく遠坂。少しだけ愛おしさがこみ上げてくる。あ、恋愛感情とかは関係ないからw

「でも…、遠坂仕事とかあるでしょ？」

遠坂を引き込んだらさすがに部長とか羽柴の奴がうるさいつなので、遠回しに断つておく。

「それは大丈夫だよ。二人の伴奏ダビングして楽屋とかで練習すればいいんだし。」

そんな笑顔で言われたら断る物断れないし…。仕方がない、ちょっと辛いかもしぬないが現実を見て頂こう。

「俺たちに合うかどうか一回試してみるか。放課後、部室に来て。俺はこれ以上、何か言われたら困るので足早にその場を立ち去つた。」

移動教室 美術

先ほどのことを隆史に話すと案の定、ニヤニヤしだした。殴り倒しそうになるほど腹が立つ。

「あのアイドルがねえ。良かつたじやんか。」

「良くない。正直迷惑だし。また部長とかに言われるだろ？」

「そりゃあそудаが…。」

「それに羽柴の奴に『ボク達を恐れて遠坂さんに頼み込んだのでしよう。』とか満面の笑みで言われたらムカツいて仕方ない。」

「でも、当の本人は本気なんだろ？ どうやつて断るつもりだよ。」

「わざと合わないような曲を弾いて諦めて貰う。+部長と羽柴の嫌味も混ざれば効果観面だろ。」

「むごいこと考えるんだな。」

呆れたような顔をされても俺は断固として遠坂を受け入れない姿勢

を保つ。

そして運命の放課後、部室。

いつも通り俺たちは隅のほうに追いやられ（いつか必ず部長を叩きのめす！）練習をしていた。周りの連中も俺たちのことなどお構いなしに、弾きまくる。何が何の音だか分からぬ状態だった。

「今日つて遠坂さんくるんでしょ？」

この女、ドコでその情報を入手したんだ。

「そうだよ。」

おれは素っ気なく答えた。

「小谷君もなかなかやるわね。他の男子に邪魔されたでしょ？」

「いや、あいつが来たい、やりたいっていうから仕方なしに。ホントはやらせたくないんだがな。」

「え？ どうして？ 彼女トップアイドルなのよ。当然歌もそこの人より断然上手いはずじゃない。」

「遠坂だから気にくわない。羽柴や部長にまたブチブチ嫌味を言われるだろ？」

「それもそうね。ま、頑張ってね。」

どいつもこいつも一矢一矢しやがつて。

と、騒音が鳴りやんや。遠坂のお出ましか。あんまりやりたくはないんだがこれも諦めて貰つたま。いつちよ、いじるか。

俺は重い腰を上げた。

如月の休日（前書き）

2000ヒット特別編

如月の休日

ふあ～。眠い。もう少し寝かせてよお～。
携帯の着信音で私は起こされてしまった。誰だか知らないが絶対に
怒つてやる！

「よ…よしひちやん？！」

今までの不機嫌さが一気に消し飛んでしまった。ようちやんのこと
なんだから起こしてくれたのだろう。

『は、はい。』

『よお！起こしちまつたか？』

『全然。朝食べてきた所だよ。』

『嘘付くなつて。寝声だつてバレバレ。』

そ、流石よしひちやん。だてに幼馴染みやつてないな…。

『えへへ。』

『えへへじゃねえよ。眠いんだろ？切ろうつか？』

『そ、そんなことないよ。もう、起きる時間だし。』

『そうか。頼んでる歌詞のことなんだけれど…』

それから20分あまりよしひちやんと歌詞のことでお話できた。今日はイイ休日になりそう

「早紀？起きてるの？」

下からお母さんが尋ねる。内のお母さんってとっても料理上手だから3食の「ご飯」が楽しみで。工へへ

「起きたよ。今から降りるね。」

私は素早く着替えを済ませて、リビングへ降りた。

「雑誌来てるわよ。」

小説家を目指す人なら必ず読んでいるといつ、雑誌「新人」。先月ここに応募したからちょっと楽しみで。

「早く食べてしまいなさいね。」

「わかった。」

ロールパンを口にくわえてモゴモゴしながらバラバラ雑誌をめくると、入選者一覧に辿り着く。

え～っと…朋美…朋美…。そう、私のペンネームは朋美。応募では本名を出しているけど、入選発表はペンネームなのだ。残念、入選には無かつた。どうせ、他のところで入選しているはずもないで閉じて、食事に専念する。

ルルルル…

電話が鳴った。お母さんは用事で出でているらしく仕方なしに私が取る。

『はい。』

『こちゅう、×出版の新人を担当している天野と申しますが。』

『はあ…。』

『如月 早紀さんはいらっしゃいますか？』

『私ですが、何か？』

『ご存じだと思いますが、大賞に入選されましたので掲載させて頂きたく、承諾のご確認の電話を差し上げたのですが…。』

『え？ 大賞？ 私が？』

『はい。まだご覧になられてませんでしたか？』

『ちょ、ちょっと待つて下さい。』

慌ただしく「新人」をめくつた。大賞…大賞…！…！

確かに、大賞：朋美 となつていて！

夢のようで、夢のようでどうしたらいいのか分からずしばらく唖然としてしまつた。

『す、すいません…。驚いたのもですからつい…。』

『いえいえ、構いませんよ。では、ご承諾頂けますか？』

『はい。粗雑で申し訳ございませんが、よろしくお願ひします。』

『ありがとうございます。これからも執筆・投稿よろしくお願ひし

ます。』

嬉しさで、嬉しさで、むべつけじよつもなくなっていた。
もし、よひちゃんが電話で起こしてくれなかつたら、今頃天野さん
の電話に出れなかつただろう。

その夜私はよひちゃんにたっぷりの愛情を込めてメール送つた。

”あらがとう。”

地獄のテスト

「遠坂さんコツチ、コツチ。」

山口が気を利かせて遠坂を俺たちの所まで案内した。案の定、その後ろには部長と羽柴それに野次馬どもが付いてきていた。

「小谷、どういう事が説明してくれるかな？」

部長はいつもの傲慢な態度でしゃべり掛けってきた。

「遠坂が俺のバンドで歌いたいって言つからちょっとテストしてみようと思って。」

「おかしいねえ。遠坂さん、軽音部に入つてさえいないのに…。もしかして小谷、お前が頼んだんじゃないの？」

ウチのバンドに来てくれ！ アイツの所なんかに行かせないぞ！ ついでいうのがバレバレだ。俺は都合良くその話に乗っかることにした。

「俺は頼んでいま…」

「私が言ひだしたんです。」

よ、余計なことを…！

「遠坂さん、コイツに一体どんな弱みを握られているか知らないけど、この機会だ。僕たちのバンドに来ないかい？ 普段お互い見知っているから、すぐに合うと思うよ。」

横から羽柴が出てきた。おおナイス羽柴。

「羽柴さん、すいませんが小谷君のところが先約なので…。それにどうも、ループ×ループの曲風と合わないみたいなんで…。」
だんだん尻すぼみになつていつて「私嫌いだし。」つていうのを俺はからううじて聞き取れた。

芸能界でもすんげえ嫌われてるんだな、俺同情したよ。

「仕方ないです。それじゃ、さつさと初めて貰えませんか？ 私たちの練習の邪魔になるんで。」

そういうと羽柴はギャラリーにとけ込んでいった。言つだけ言つておいて逃げやがった。

「陽介、んじや 文化祭で歌う予定のサンシャインで行くか。
「だな。それじゃ、俺が弾きながら一回歌うから、歌詞見ながらでもいいんで後から歌つてみて。」

俺と隆史は田で合図して、少しもずれずに同時に演奏し始めた。
その時点で周囲の驚く目。もちろん遠坂も。

ズンズン、隆史のドラムが印象的なパートで俺は唐突に歌い出す。

煌めく太陽
立ち上る陽炎
そう夏真っ盛り

気温が高くて

暑苦しいけど 息苦しいけど
行こうぜ 夏祭り

The summer festival

夜空に輝く花火

太陽のごとく光 照らす

哀愁漂わせる僕らを一掃する

夏の風物詩

恋人達の物語

全てはこの時のために…

輝くファンタジスタ

夢のような夏を超えて また一つ思い出を創るんだ

未来に続く夏物語り

また来年も創れるかな?

叶わない儂い恋も
叶わない儂い夢も
叶わない儂い明日も
ボクらが変えて行くよ

その思いでは永遠の詩となり 少年達の記憶に
刻まれる

永遠に

またこの場所できつと余おう

歌い終わると万雷の拍手。まだまだ試作段階なのにこんなに受ける
つてこいつらの感受性を疑つてしまつ。隆史は得意そうに笑つてい
る。ま、試作とはいえ拍手を貰えたら嬉しいけどな。

「それじゃ、歌つてみて。」

俺は遠坂に手書きの歌詞を渡して隆史と弾き始める。
今度は目も合わさず。

ズンズン

少し遅れて遠坂が歌い始める。ボロみつけ

俺は自然と細く微笑んでいた。おっと、真面目に講評しよう。
遠坂の声はますます。音程も所々怪しいところがあつたけど、周り
の連中は気付いていない。音程で攻めるのは難しいだろうな。
歌い終わると俺たちよりも拍手が凄まじかつた。ギャラリーにはタ
ダで生聞けて良かつたつてうれし泣きしてる奴もいる。大したこと
ないだろひた。

「やつぱ、合わないな。」

俺は拍手が鳴りやまないうちにボソッと告げた。

「音程合ってないところがあまりにも多すぎる。」

「僕はあなたの所に入つて欲しくはないのですが、音楽をやつてい
る者として言わせて頂きます。完璧に合つていたと思いますが？」

羽柴の奴がしゃしゃり出できやがつた。予想はしてたがな。

「一般論だろ？俺も隆史も主旋律の音程、楽器で鳴らしてたんだぜ
？それを聞き分けることも出来ない結果、音程が外れるつていうこ
とになつたんじやないか？」

「そんなの、聞こえませんでしたが…。」

「強調して弾いてやる、良く聞いておけ。」

俺は隆史に目で合図して他の音を下げて、主旋律のメロディーをギ
ヤラリーの奴らにも聞こえるように弾いてやつた。

「さつきと同じだろ？」

「はい…、そのような音が入つていました…。」

ループの羽柴が折れて誰も反論する者はいなかつた。

「と、いうわけだ。残念だが、諦めてくれ。」

「いや…です…。」

「嫌つて言われても…、合わなかつたんだからしじうがないだろ。」

「来週、もう一度チャンスをください。今度は必ず歌えるようになりますから。」

熱心な眼差しで言われたらさすがの俺も断りきれず…

「来週がラストチャンスだ。もつすぐ別の曲出来る予定だからそれ
をテスト材料にする。」

俺は帰る用意をしていたので、荷物を持ち帰り際遠坂にそつと耳打
ちした。

「明日、俺の所へ來い。」

突然の告白

昨日のこととは瞬く間に学校中に広がっていた。

朝、下駄箱に大量の画鋲が入っていたり、机の中に黒い紙を入れられたりした。どうやら、昨日の報復のつもりらしい。

「遠坂いびるからだろ?」

「小学生がやるようなことをして何が楽しいんだか…。」

俺はこんな事位しかできない、周りの男どもにほとほと呆れていた。「まあまあ、昨日は相当なショックで仕事も休んだらしいぜ。明日丸つぶれだな。」

「興味ないな。で、お前は大丈夫なのかよ。」

「周りの女子が止めてくれたらしい。こいつら時は感謝感激だな。ちゃんと聞こえたぞ。『普段はウザイけど。』っていうのを

「隆史らしい理由だな。お、噂をすればだ。」

遠坂が教室に入つて来るなり、まっすぐ俺の所まできた。いきなり昨日のことで話すつもりか? いくら何でもテリカシーなさすぎるだ。 「その…。私のせいでこんな事になつてごめんなさい。」

「はい?」

「なんであやまんの?」

「だつて、私が…私が…。」

「合わないって宣告したのは俺だよ。遠坂がやれつていつたんじや無いんでしょ? だつたら誤る必要ないじゃん。」

「でも…でも…。」

「あ~俺そういうの嫌いなんだ。わざと戻れよ。」

俺はいらついてきて思つたことをこつちました。

遠坂は黙つてうつむいたまま席に戻つた。

「お前…、今のはひどくないか?」

そつと隆史が言つてきた。

「言ひ過ぎたと思つけど…。正直なところ迷惑じやん。」

「はあ～。分かつてやれよ。」

隆史は呆れた様子で、俺を見つめる。分かつてやれってアイツのどこをどう分かれって言つんだよ。

「無理無理。そんなことより、さあせと歌詞つべつかまおうぜ。」

俺は多少の後ろめたさを感じながら、それを振り払つかのように歌詞作りに没頭した。

普段より、授業が長く感じた。遠坂のことが頭から離れられなかつたんだらア。

放課後、誰もいなくなつたのを見計らつて俺は遠坂に声を掛けた。

「よお。」

遠坂は俺を見るとうつむいた。

「なんで、あんなにひどく言われたのにバンドに入ろうとするんだ？普通なら逆ギレして出でこつちまづ。」

「……。」

「だんまりか……。」

「……だから。」

「え？ はつきり言えよ。」

「好きだから。」

「は？ ？ ？」

「好きだから！！！ 私は小谷君が好きだからーー！」

突然の告白にさすがの俺も動搖を隠しきれなかつた。

「な……なんで？」

「傘貸してくれたとき嬉しかつたから、返したいと思つて学校を探したの。」

「それであんな中途半端な時期に転校してきたのか……。」

遠坂は黙つてうなずいた。

「俺はてつきり頭の方が……。」

「バカ！」

遠坂は持つていた鞄で殴つてきた。

思わず笑みがこぼれる。

「あ…笑つた。」

幸せそうに笑いながら言われて俺はどう、対応するか分からなかつた。

「笑つちや…悪い…かよ。」

赤面を見られないようにそつぽを向く。

「だつて初めて笑つてくれたもん。普段は、齊藤君か如月さんと一緒にじゃないと笑わないのに。」

「見てたのか…。」

「うん。転校してきてずっと…ずっと…。」

「……。」

「いつからだ?」

「え?」

「俺のことそういう風に思つよつになつたのはいつからだ?..」

「軽音部で楽器を弾いてた頃から。」

とこうと一週間とちよつと前か…。

「格好良かつた…。初めてだつた…。胸のドキドキが止まらなくて…。初めは私、何かの病気じゃないかって思つてて。気付いたら小谷君のことが好きになつてて。」

「それでバンドに入りたいつて言つたのか。」

「うん…。直接言うような形になつちやつたけど、氣付いて欲しくて…。初めは人数不足してるみたいだし、私…その…アイドルだからすぐに入れてくれて貰えると思つてたんだけど…。」

「俺は本当に入つて欲しくなかつた。嫌だつたんだ。部長の田も、羽柴の田も、周りの田も。ただでさえ隆史の奴が女子にモテてみんなからの視線にさらされて。そのつえお前まで来るつて言い出すんだからどうすりや、いいんだつて。」

「でも実際私、自分に自信ありすぎてたように思つ。自分のレベルの低さに驚いて、小谷君達のレベルの高さに驚いて。ますます惚れ

ちゅうひ。

恥ずかしそうにうつむく遠坂。

「やっか…。お前の気持ちは分かつたよ。俺は遠坂と付き合えないし、誰とも付き合つつもりはない。それに一緒に歌つつもりもない。」

「どうして…。私のドコがダメなの?絶対直すから…。」

「遠坂の問題じゃなくて俺の問題なんだよ…。気持ちは嬉しいけどさ。」

つい、西城のこと思い出してしまつ。昔の辛こ過去…。もう一度とそんな重いはしたくない。

「…りめない。諦めないから!小谷君の問題も抱えれるようになるから!」

俺は哀れな目で遠坂を見た。

「こつかそんな口がきたらいいな…。」

仲直り

翌朝、俺は普段通り憂鬱な気分で学校に登校した。

未だに遠坂の言葉が耳から離れない。

「よお！ってお前すげえ顔だな。」

「つるせえ、元からだよ。」

隆史に付き合う気力もなく、そのまま席で沈没してしまった。

「遠坂に何言われたんだ？」

「お前には関係ないだろ。」

ふう～と隆史は大きなため息をついて、俺のそばから離れていった。

思い出したくない、封印したはずの過去がよみがえる。鮮明に、昨日よりも鮮明に。

同じ思いを味わうのか…。辛い辛いあの思いを…。

もうたくさんだ。俺の事を勝手に好きになつて…

俺の気持ちも考えずに、そんなに俺を苦しめたいのか…！

俺はみんなに悟られないようにひとり涙した。

俺を揺り動かす小さな手。

ドコか小さいとき同じ事をされていなかつたつけ？

淡い幼稚園の頃の記憶…そうだ、思い出した。

あのとき、閉じこめられて出られなくなつて、一人で泣いていたときだ。

ふいに暗闇から手が伸びてきて、俺を揺り動かしたんだ。この感覚は…

「さつちちゃん？」
「あ～おはよ～。」

いつの間に寝ていたんだろう。もう、授業が終わっていて、誰もない教室に如月と俺の2人っきり。

「なんでこんな所にいるんだよ。」

「ようちやんが心配になつて。でも、ビックリしたよ。こきなりさつちやんって言つただから。」

「つ…うるさい。忘れる。」

俺は恥ずかしさの余り赤面してしまった。

「アハハ。ようちやん昔つから何一つ変わらないね。私には何考えてるか分かるよ。」

「当てるみろよ。」

「西城さんのこと考えてたんでしょ？」

「う…。」

どうしてコイツは人の氣にしてる過去を…って言つつか何で分かるんだ？

「何で分かるんだ？って思つてるんでしょ。分かるよ…。ずっと見てきたから。」

「ずっと？？」

「うん。ずっと。」

突然教室のドアが開いて、隆史と遠坂が入ってきた。

「遠坂には西城のことを話した。」

「そうか…。」

「じめんね…。本当にじめんね…。私、何もしらなくつて…。ただ、小谷君だけを見ていたくて…。」

「もういいさ。」

「でも…、でも…。」

「しつこい。」

「「めん…。」

気まずい沈黙が流れた。俺は遠坂のこいつの所が嫌いだ。全部自分で背負い込もうとする。

「さて、陽介も起きたところだし帰るか。」

「うん。そうしょようちやん起きてー遠坂さんも一緒に帰るつ。俺たちはそれの思いを胸に抱きしめながら明日に向かって歩き始めた。

バンド名決定

遠坂とのわだかまりも無くなり、俺は初々しい気分で作詞に取りかかった。

今日は何かと思いつく。といつても俺の両隣を独占する遠坂と如月のお陰なのだけど…。密着しそぎ（・・>—>）

「今思つたのですけど、このバンドの名前聞いて無くて…。」

「え…名前…名前…名前ねえ。おい、隆史ーこのバンド名つてなんだっけ?」

「あ?そりや…その…アレに決まつてんじゃねえか!」

「アレって?」

「……。」

「……。」

「もしかして決まつてないのじや…。」

そうです、その通りです。活動するとは思つてなかつたので決めていませんでした。どうしましょー、どうしましょー

「じゃ、今から決めようよ。私、山口さん呼んでくるね。」

如月は慌ただしく教室を出て行つた。

「そうだな…。バンド名つて言われても…、歌詞も口クに思いつかない阿呆2匹に言われてもなあ。」

「阿呆はお前一人で充分だ!!--」

つち、俺まで阿呆扱いしやがる。

俺たちのやりとりを見ておもしろかったのか、遠坂は笑い転げている。

「お前も笑いすぎだ!!--」

「だつて…あはは…ダメ…もつ…ヒーヒー」

だから笑いすぎだつて。

「お待たせへ。」

如月は整備中だったと思われる出口の手を引っ張つて来た。山口の

手には工具が握られている。

「何よ？ いきなり。」

「Hへぐ。これからよしあやん達のバンド名を決めるから山口さんも呼んできたのだ。」「

「はあ？ なんであたしが…。」

「だつて山口さんよしあやん達の専属アシスタントなのでしょ？ 立派なメンバーじゃん。」

「まあ、そただけじゃ…。小谷くんとかあたしがメンバーだつて認めてくれているワケじゃないのだよ。」

「ええ…。そんなのよしあやん？」「

う…、そんなに田をキラキラさせてゴシチみるんじやねえ…。俺はその攻撃に弱いのだ。

「隆史…。」

「え…イヤ… その…。陽介、お前が決めろ。」

「え…。如月が言うならそいつなのだろう…。」

負けた…。

「ほらね。私は作詞して、遠坂さんが歌うの。」

「つてオイ。遠坂は認めてねえぞ。」

「ダメ？」

またあの瞳キラキラ攻撃…。負けんぞ…！俺は負けんぞぉお…！

「ダメ…。」

「ええ？…」

遠坂まで…。うう苦しい…。男として…。

「その通りです…。」「

負けた…。

「ほりね。よしあやん話せば分かつてくれるのだよ。」「

俺が唯一弱いのが如月つてことがバレてしまった。遠坂と山口の邪悪な笑みが俺には見える…。怖い…。

「アリスなんかどう？」「

山口の提案。

「却下。どこのギター二人組のバンドかとマネする奴がいるのだよ。しかも、時代古いし。却下、却下。」

ブーたれる前に完全否定しておく。

「えへ、せつかく考えたのに…。齊藤君はどひ思ひへ。」

「ん? 阳介に任せる。」

「んな! 無責任な!!」

「じやあ、サタン!!」

「悪魔かい!!」

ガラにもなく思わず突っ込んでしまった俺。なにはしゃいでんだ。見苦しいぞ。

「アハハ。突っ込まれたw」

如月さんの無邪気な笑顔は無敵です…。

「遠坂はなんかアイデアないの? 一応、ボーカルだんだし…。」

「ん~…。今度の新曲でボツになつたタイトルなのだけど… E D E N ってどうかな?」

「E D E N かあ…。」

俺は少し言葉の響きが良かつたので候補にしておくことにした。

「E D E N ってたしか永遠の楽園つて意味だったよね。」

無責任な隆史が唐突に横やりをさす。

「齊藤君よく知っているね。」

うわw如月の笑顔で照れて屋がる。

その後さんざん話し合つた結果、バンド名は遠坂の「E D E N」に決まった。

「それともう一つ…。小谷君のメールアド教えて…!」

ははは、「これが目的で今日遅くまで残つたのだな。

「ヤダ。」

「いいよ 赤外線でどうぞ。」

つてオイオイオイオイオイ…! 如月なに勝手に俺のメールアド教えて

んだよ。

「待て待て待て待て！！人のメルアドを勝手に教えてもイイって習つたか？」

「ほえ？もう、送ちやつたよ。」

「次あたし～。」

「はいは～い

」

は～言つているしつから…。疲れる…。

「後で隆史のメルアドも一斉送信しつべからな。」

「え、ちょっとそれはひどいのじ…。」

「問答無用！～」

俺はさうそく遠坂と山口の返信にて隆史のメルアドを載つけて送信した。

全国大会？

春も終わり、夏の色が見え始めていた。

お決まりのメンバーでダラダラしていたそんな日、山口の奴が大あわてで教室に入ってきた。

「何あわててんだよ。」

「えつと…ハアハア…あの…ハアハア…あの…。」

「まずは落ち着いてから、ね？」

隆史の惱殺スマイル。そういうえば「惱殺」って死語だつたな。

「落ち着いたみたいだな。何だよ？」

「全国大会があるって知つてた？」

「は？ 全国大会？」

「うん。優勝すればレコードイングして貰えるの。全国のミュージシャンを目指す高校生が集まる、夏の一大イベントなんだよ。」

「へえ～、興味ねえ。俺はバス。」

「面倒くさいから俺もバス。」

「私仕事で…バス。」

「言つと思つた…。でもね、中杉先生がこのメンツなら必ず優勝できる一部費稼げる！って勝手に応募しちゃつたみたいなの。」「はああ？ マジでいつてんの？」

「マジ、マジ。だからあんなに慌ててたのよ。」「俺の頭の片隅で何かが切れるような音がした。

「ちょっと、中杉のところ行つてくる。」

俺の状況を察知した隆史と如月は必死になつて俺を止めよつとした。

「待て、落ち着くんだ。」

「ようちやん待つて！！早まらないで！」

状況が良く理解出来ていらない二人は啞然として見つめている。

「これ以上先にいくつて言つなら俺はお前をぶつ殺す…！」

「ちょうどいい。…死ね。」

あ～、なんと言えば良いんだろ？「うん、取りあえず俺の気は収まつた。

でも少々暴れちゃって、隆史が失神しちゃった テヘッ
「ようちゃん…やりすぎ。」

う…、小学校以来だ。如月の「パンの威力は未だに衰えず…。俺の意識はだんだん薄くなつて行く。

あ～、花園がみえる～

「…きて！起きて！」

激しく体を搖すぶられ、俺は意識を取り戻した。

失神してからあまり時間が経っていないようだ。小学校の時と同じだな。

「てて…。」

「男の子なんだからあの位で、泣かない。」

いや、あの位つて…。失神するほどの「パン放つ」というセリフか？

「小谷君大丈夫？」

「やっぱ如月…怖い…。」

「私も思った。」

遠坂は俺に激しく同情してくれているらしく、やや赤い額に濡れたハンカチを置いてくれていた。

一方俺に張り飛ばされた隆史といつと…、山口に介抱されていても未だ起きず。

「いつまで寝てんだ。起きる。」

俺はいつものように脇腹を一蹴りした。

「うげ。もつと丁寧に起こせよ。ま…、お前にはり倒されたのは久

しぶりだな。」

「ほっとけ。で、全国大会とやらには絶対にでなくちゃならんのか？」

「うん…。校長先生も乗り気でP.T.Aの方々にも応援を要請するつて。」

「はあ～。遠坂か…。」

「うん…。」

「ごめんね。本当にごめんね。わがまま言わずに私がバンドに入らなければこんな事にならなかつたのに…。」

「もういい。仕方ないだろ。日取りは？」

「今週の日曜日が予選。」

「は？ 応募いつだつたの？」

「一ヶ月前。」

え～っとするとあの中杉はずう～つと黙つていたわけだ。コルス！

「やつぱり中杉叩きのめす！」

「ダメだつて！…！」

鈍器で殴られたような衝撃が頭に走り…、本日2回目の失神。

曲決め

急遽、文化祭用の曲を破棄し（2時間掛けて創ったのに…）新しい曲を作ることに。

「歌詞書いてきたよ。曲の方はよつちやん達が上手く創ってね。」

「曲ぐらいなら30分もあれば出来る。後はボーカルがどんなけ付いてこられるかな。」

「頑張ります…。」

如月が書いてきた新曲はこんな感じだ。

レクイエム

灰色の空 今日は雨が降りそうだな
傘はあるにはあるんだけど
たまには雨に濡れるのも良いんじゃないかな?
雨降りの日は何時になく静かで
世界が止まったようで
悲しくなる だけど
その先の向こうに
君たちが待っている

行こう！恐れずに
ひたすら前に進め
君たちが待っているのなら
何を恐れるんだ！

グローリアス

世界は繋がつて 丸い球体で
ドコかが不完全なら

たちまち崩壊してしまつ

グローリアス

みんな同じで 何一つ違わない

人種 国籍 民族 国家

それが何だつて言つんだ?

一人が雨で泣いていたら
みんなが手を差し伸べる
近い未来 そんな世界がくるといいね w

「こんな重い歌…。私で歌いきれるかな?」

確かにこの歌詞が行つていることは凄く重い。

「大丈夫だよ。レクイエム、鎮魂歌つてなつてるけど、実はようち
やんと遠坂さんの出会いを元に書いてみたんだ。」

照れくさそうに如月は笑う。

「ホントだ…。ライブの後雨で困つてたときに小谷君が傘貸してくれたっけ。」

灰色の空 今日は雨が降りそうだな

「ま、俺は…西城が傘買つてきてくれたから、必要なかつたわけで
…。」

傘はあるにはあるんだけど
たまには雨に濡れるのも良いんじゃないかな?

「もしかして君たちつて私たちのこと?」
「大正解。さすがだね山口さん。」

雨降りの日は何時になく静かで
世界が止まつたよう
悲しくなる だけど
その先の向こうに
君たちが待つて

君たちが待つて

「これなら問題なく曲付けできそうだ。陽介、早速やるか。」

行こう！恐れずに
ひたすら前に進め
君たちが待つて
何を恐れるんだ！

「国籍って？」

「ああそれはね。今私が書いてる小説についてなんだ。」

グローリアス

世界は繋がつて 丸い球体で
ドコかが不完全なら
たちまち崩壊してしまつ

グローリアス

みんな同じで 何一つ違わない
人種 国籍 民族 国家
それが何だつて言つんだ？

一人が雨で泣いていたら
みんなが手を差し伸べる

近い未来 そんな世界がくるといいね w

「如月さんらしいね。なんだかスッキリした。何とか歌えそう。」

「良かつた。練習頑張つてね！！」

運命の全国大会まであと4日。遠坂がその間どのくらい化けるかが心配だ。

猛練習（前書き）

すいません。かなり短いです。

それから一日間といつもの、俺たちは放課後をフルに使って練習をした。

ボーカル・エレキ・ドラムっていうなんだか味気ないバンドだけど、それをカバー出来るだけの歌唱力と演奏力を備わっているから、まづまず予選落ちはないだろう。

いざ、明日って言われてもなんだかやる気が出ない俺。

「また休んでる！明日だよ。」

「も～ちょっと～。ってか面倒くわ～、山口、口づねわ～。」

「学校中の期待がかかつてゐつて、じびつして小谷くんはやる気がないのかな！」

ウヘ。ホント口づねわ。たまたもんじゃない。いつなつたらコツソリと帰つてやるわ。

「よつちやん今、コツソリと帰つてやるつて思つたでしょ。」「う…、鋭い、さすが如月。

「イヤ、ソンナコトアリマセンワ。」

久々の棒読み。俺つてこんなキャラだつけ？

「ちゃんと練習しないと…。お持ち帰りさせなによ…。」

つて何あんた爆弾発言してるんだ！！仮にもトップアイドルだらうが。

「隆史、変なこと吹き込むな。」

「なんで分かつたの？」

「お前ぐらいしか吹き込むような奴、いないだぶ。」

「あ、確かに！」

なに納得してんだよ。ほんつと疲れる…。

「ダラダラしてないで、ほひ。」

なんだかな～。如月の奴最近俺に世話を焼きすぎでないか？

「しんど～～。」

「まだ5円じゃん。よつひちゃんが本氣で倒れるのは8円辺りでしょ

？」

「小谷君つて夏に弱いの？」

「うん。熱かつたりすると干物になつちやう。」

「可愛い」

遠坂：「可愛いくないし。本人は生死の境を彷徨つてるんだぞ。

「ちゃんと練習したらアイス買ってあげるから。」

「アイスなんてガキじゃあるまいし…。」

「だつて、ようちゃん、小学校の頃…。」

「はいはいはいはい。小学校の頃のくだらない思い出なんて放つておいてさつさと練習しようぜ！予選明日なんだろ？おい、隆史何寝てんだよ。起きる、練習するぞ。遠坂もジューク飲んでないで、さつせとマイクの前に立つ。山口、ボーツとしてないで機器のメンテしろよ。如月は評価任せた！！」

ふう～危ない、危ない。やっぱ如月は恐ろしい…。

みんなはなにやらクスクス笑つてスタンバイし始めた。

いくら5月だからといつても今年は熱い、日差しがきつい。

「じゃあ、最初から1・2・3～」

その後、中杉が来るまで練習を続けた。

予選・挑戦状

ついに予選の日、正直言つて真面目にやるやしない。適当にサラつと流して予選落ち。これが俺が描いた理想の形だ。

が、俺と隆史以外の奴はやけに燃えてやがる。必勝ハチマキまでしてるし…。

「ようちやん、今日はなんとしてもトップで勝たなくちゃならないのよ。」

え…天然キャラの如月さんですか？

「小谷君。いくつか予備のギター持つてきてるから存分にいっちゃんつて！！」

そうそう壊れないと思うんですが…。

「小谷君。私に赤つ恥をかかせないでよ。かかせたら結婚して貰うからね。」

あなたが一番しつかりしないといけないんでしうが…。でも、結婚はヤダメ。

「はいはい、全力でやらせていただきます。」

「「「ハイは一回ーー」」「

「はい。」

うひやあ～こええ～。

「今日はビッグゲストも来てるから、頑張ろ!ぜ。」

隆史の奴、一体誰を呼んだんだ。

「誰だ？」

「秘密。」

「・コノヤロウ…（怒

「そこ！リハやるわよ。」

如月さん怖いです。ハイ。

「一回で全部決まるのよ。それに待機室は2組前からじやないと使えないからね。」

「だからって、じんな朝っぱらかい。」

大会は9時、今は7時。

「実質1時間30分よ。無駄にしたら承知しないからね。」

俺たちは有無を言わせて貰えずに練習させられた。本番前に演奏させるつて鬼…。

1時間45分後。俺たち（男子陣）はくつへトになっていた。

「この位で疲れてどうするの？」

「ひえー、それ以上いじめなこで。ママン…

「取りあえず受付を済ませましょ。」

山口が率先して行く。さすがにアシスタンントだけあっていつもとき頼りになる。

開場は厚生年金会館。遠坂と西城の思い出がある場所だ。すでにほとんどの受付が終わっており、名簿には名一杯の印がついてあつた。

「泉ヶ丘高校の方ですね。89番になります。」

受付の姉さんから番号札を貰い、空いている席に腰を下ろした。

「陽介、緊張してるのか？」

「は？ なんで？」

「妙に口数が少ないぞ、お前。」

「いや、こんな面倒なことになるなんてな。」

なんて他愛もないことを隆史としゃべっていたら、いつの間にか男子どもに囲まれていた。

「もしかして、遠坂ヒカルさんですか？」

「あ～、遠坂のファンか。納得。」

「やうですけど…、なにか？」

「いやいや、どう見たってここから下心見え見えだろ。なに知らないフリしてんだ。」

「俺たち、遠坂さんのファンで、その…サイン頂けますか？」

「俺は一緒に写真取つて下せー。」

「握手して下さい。」

あ～もう～わらわらと（怒

俺は「」ういうのが大つ嫌いだから、男どもの包囲網をくぐり抜けてロビーに行くことにした。気持ちを落ち着けるために自販機缶コーヒーを買おうとしたら、また変なのが「」ッチに近づいてきた。

「君つて確か遠坂と一緒にいたよね。」

いかにも不良ですつていつてるような姿をしてる男。ケンカ弱そう

…。

「ただけど。」

「君たち泉ヶ丘高校つて毎年この大会出ても下の方でしょ？だから遠坂雇つたの？」

なんなんだ「」イツは？

「アイツが勝手に入つてきただけ。そんな仕事だしても、アイツ来ないでしょ？」

「でも、中途半端に転校したつて聞くよ。あ、校長が勝手に雇つたのか…。そつかそつか、「」めんね。気付かなくつてさ。」

「あんた名前は？」

「ああ、富竹 裕太。よろしくね。」

満面の笑みで握手を求めてきやがる。「」イツそんなに殺して欲しいのか…。

「僕を殴りたいって顔してるね。でも、今口口で問題を起こすのはまずいんじやないかな？」

「・コイツ…。いつか必ず殺してやる。」

「泉ヶ丘に遠坂がいても、所詮伴奏が伴奏だからね。僕ら名城の敵じゃないね。おつと、時間だから行くよ。」

不良スタイルに身を包んだ富竹はその場をさつていった。

「」イツ…名城とかいつたな。フフフ、おもしろい。完膚無きままに討ち滅ぼしてやる。フフフ、ハーツハツハツハ。

俺は、名城の富竹のバンドを打ち倒すと決心した。

決起

俺がメンバーの所に戻ったときには、すでに遠坂ファンは少なくなつていた。

「陽介…。どうしたんだ、そんなに殺氣を放つて。」

「口口ス…。」

「え? 誰を?」

「名城の富竹。」

「なんで?」

俺はメンバーに先ほどのにきさつを話した。

「なによそれ。わざわざ遠坂さんがこの大会のために雇われたみたいじゃない。」

「山口さん? 話聞いてました? そういうたんですよ、富竹は。」

「私…小谷くんに会いに来ただけなのに…。」

「俺は、あの名城の富竹には負けたくない。なんとしてでもアイツより上にいく。」

「でも、名城つてこの大会の優勝候補だよ。」

「如月、口口は相手がどんな奴かなんて関係ない。売られたケンカは買ってやる。」

「そうだぞ。この借りはキッチリ返させてもらひからな。」

「隆史の奴が珍しく不適に笑う。」

「絶対優勝しようね。」

山口は気合いを入れて機器のメンテに入つた。

予選が始まつたが、他の奴らなんて関係ない。俺たちの倒す敵はただ一組。名城のみ!」

「そろそろ、楽屋にいきましょ。」

遠坂が言つ。もう、そんな時間か。

俺たちはこれから前線へ出る、兵士のような心情だった。これはた

だの勝負ではない、戦争だ！ 楽器を武器に、己の声を信じ、闘志を歌詞にのせ審査員の分からず屋どもに叩き付ける。

「ヒントリーナンバー89番、泉ヶ丘高校のEDENの皆さんです！」

司会者が場の空気を盛り上げる。遠坂がいるところで注目度ナンバー1のこのバンドについてにスポットライトが当たられたのだ。

「オリジナル曲レクイエム、どうぞ…」

俺は静かに、武器を掲げ弾き始めた。
纖細に細やかに。

そして隆史のドラマが入る。嵐のような怒濤の演奏は上手くギターと混ざり合い、会場を支配する。

俺も隆史に負けじと荒々しく弾き初め、お互いが絶頂に達したとき、遠坂が歌い始めた。

おし、タイミングばっちし…！

灰色の空 今日は雨が降りそうだな
傘はあるにはあるんだけど
たまには雨に濡れるのも良いんじゃないかな?
雨降りの日は何時になく静かで
世界が止まったよう
悲しくなる だけど
その先の向こうに
君たちが待っている

行こう！恐れずに
ひたすら前に進め
君たちが待っているのなら
何を恐れるんだ！

グローリアス

世界は繋がつて 丸い球体で

ドコかが不完全なら

たちまち崩壊してしまつ

グローリアス

みんな同じで 何一つ違わない

人種 国籍 民族 国家

それが何だつて言つんだ?

一人が雨で泣いていたら

みんなが手を差し伸べる

近い未来 そんな世界がくるといいね w

短い歌詞を出来るだけ違和感を与えずに長く歌う方法を俺たちで編み出した。

中杉に無理矢理出場させられる事になったとはいえ、遅くまでみんなと練習した姿が、不謹慎ながらも日に浮かぶ。

弦で指を切ったとき、如月が手当してくれたつけ。

弾きすぎてチューングが狂つたときに山口が、調整してくれたよな。

弾きすぎて息切れしてゐ俺らに遠坂がジユースを貰つてくれたり。

今までの思いを全てこの瞬間にかけ、ラストに入る。
会場の緊張は最大に。

ここで、今まで激しかった演奏を俺たちはやめた。

そして怒濤の拍手。ちらつと富竹を探すと梅しそうに唇を噛んでやがる。へ、さまーみる。

退場しても拍手がしばらく鳴りやまなかつた。予選は俺たちの優勝で決まりだな。そう、確信して座席へと戻つた。

表彰式（前書き）

短くてすこません…

表彰式

俺たちの後、ほとんどの組は迫力に欠けていた。

それは会場中が一致していたようで、まさしく聞く耳持たず。

順調に進み時は4時。ほとんど、感想を述べに来た遠坂ファンの対応に追われ、退屈せずにすんだ。まあ…その分イライラも溜まったけど。

「それでは結果発表です。全国大会に出場出来るのは上位3組のみ、それでは発表します第10位から…。」

司会の奴が言葉巧みに会場を盛り上げて行く。順位が上がるにつれて、緊張も高まる。

「さて…、いよいよ第3位の発表です。第三位、私立法政学院高校！」

右横の座席から歓声があがる。会場からはまばらな拍手。どうやら発表されて全国には行けなくなつた組の奴らみたいだ。

「続きまして第2位！県立名城高校！」

おっと、確か優勝候補だつたつけ…。予想していたみたいで今回は余り拍手はなかつた。

「第1位の発表は審査員長の柳田先生に講評を交え、発表して頂きます。」

「」紹介に預かりました、柳田です。私は14年間この予選を審査員として見て参りました。どの年も白熱した演奏と思い思いの歌を聴かせて頂きました。しかし、今年は例年に比べて類を見ない斬新なバンドが現れました。会場を一瞬の内に支配してしまった圧倒的な演奏力。そして、それに負けないような素晴らしい声。激しい伴奏に相反するような歌詞にも関わらず、なんの違和感もなかつた。恐らく全国大会ではもつともっと素晴らしい歌を聴かせてくれるでしょう。それでは第1位の発表です。市立泉ヶ丘高校…！」

会場からは耳をつんざく程の拍手。まあ、予想していたとはいえない高揚感はたまらない。一種の薬のようだ。

「第3位からの方はステージにお越しください。」

司会は拍手に負けじと声を張り上げる。俺たちは尚も拍手を送り続ける人垣をなんとか突破し、ステージに上がった。如月と山口は席で待つていると譲らなかつた。

「おめでとうござります。これが全国大会の参加証です。」

司会から渡されたのは封筒。中に参加証という物が入つていてのだろう。なんかあつけない表彰式だなと、拍子抜けしてしまつてはいる俺がいた。

表彰式の後、俺たちは楽器を担いで会場を出ようとしたら富竹の奴が声を掛けてきた。

「さつきはすまなかつたね。君たちの実力がこれほどとは…。」「までも嫌みな奴なんだよ。自分の演奏能力を過大評価してやがる。ま、俺も人のことは言えないんだけどな。口に出して言わない点が『アイツとの明らかな違い』か。

「全国大会も楽しみにしているよ。予選より遙かにレベルが上がるけど、君たちなら優勝できるかもね。それじゃ。」

相変わらずの不良スタイルはそのまま仲間の所へと去つていつた。

「陽介、あれが富竹か？」

「そうだ。」

「案外憎めない奴だな。」

「俺も思つた。」

「ちょっと自分たちに自信持ちすぎてただけなのかもね。」

「遠坂さん、でもアイツ私たちにケンカ売つてきたのよ。」

「そう、カリカリするなつて。勝つたんだから。」

「でも…。」

ブツブツ文句をいつ山口を後に俺たちは厚生年金会館を後にした。

学園アイドル？

今朝はやナニ通行人の視線を感じる。

寝癖がひどいのか？髪を触つてみると特に異常はない。それとも顔に？！ケイタイを使って顔を確認する。これも普段通り、異常なし。も、もしかして窓空いてたり？？？？！－－－！急いで公園のトイレステ入つて確認するがこれも異常なし。

「一体なんだって言うんだ!! 朝はからりイライラして、今日は最悪の一日になりそうだ。

学校に近付くにつれ、だんだんと視線が強くなる。そして、校門の前には報道陣。どうやら、制服で学校関係者だと思われ視線を送られたという結論に辿り着いた。

ポーターに捕まってしまった。

「あなた 小谷君ね？ 昨日の予選はどうだった？」

「すいません、学校が始まるんで失礼します。」

しつこくネチネチと質問を投げかけてくるリポーターを無視して、教室に向かった。

教室に入るなり隆史に詰問する。

お前新聞見てないの？」

「明日の予選で高校生
に一発アゲられていい。

「はあう。なんでこうなるんだよ。」

「しばらくはマスクから追っかけられるだろうな。俺も朝、校門でしつこく付きまとわれたし。俺らよりも、遠坂の方が大変だと思うけどな。一応トップアイドルだし。」

そうかあ…。遠坂にも魔の手が伸びるのか。

噂をすればって奴、ヨレヨレの遠坂が教室に入ってきた。

「お、おはよ～。」

「お、おう。大丈夫だつたか？」

「もう無理。死んじやう。」

そう言ひなり遠坂は俺の机に抱きついて倒れ込んだ。

「小谷君の臭いがする～。」

壊れた？！

「お前つてそういうキャラだっけ？」

隆史が驚愕の眼差しを向ける。クラスの男子陣も俺を睨み付けてくる。

「どけつて。邪魔、邪魔。」

俺は邪険に遠坂を引きはがし、彼女の本来の場所へ強制送還する。つたく、やつてらんねえよ。

「ホームルーム始めるぞ。」

久しぶりの篠山が入つてくるなり、ニタニタ笑い出した。キモイ。キモすぎやん…。吐き気がしてきた…。

「みんなも知つてるとおり、我が学園のアイドル遠坂さんとその取り巻きの活躍によつて…」

ちょい待て、俺らは取り巻きかよ？！

「…よつて我が校の知名度は急上昇すると共にニュースでも報道されるほどだ。マスコミも黙つちゃいないだろうから、クラス一丸となつて遠坂さんを守るように。それと取り巻きから情報が漏れないように、取り巻きも気にとめておいてやつてくれ。」

コイツ…。ああ～イライラする…！（怒

「今朝はこんなもんだ。授業の準備しておとなしくしてゐよう。」
言いたい放題言つて、篠山の奴は教室を出て行つた。

「小谷君、ギター上手いって噂だつたんだけどそんなに凄いんだ。聴かせてよ。」

う…、俺を包囲するな女子達よ。隆史がいるだらう…！（絶叫

「今、ギター持つてないか。」

「そっか…、じゃあ今日部室覗きに行つてもいい？」

「上田遣いで言つなあああああ！」

「今日は昨日のことがあるから早く帰ろつと思つてゐんだけビ。」

「じや、私たちと一緒に帰るつよー。」

先ほどまでとは違つ女子が親しげに声を掛けてくれる。

もつ…やめて…（涙）

「そんな気分じゃなこし…。」

「もしかして、彼女と？」

「俺はフリーだけど。」

「んじや、決定！校門で待つてるね。」

勝手に決めないで…。お願い…。

俺が心の内では泣いていたり一時間田の授業が始まった。集中でき
ねえよ。

おちかの西城？

授業終了後、俺は休み時間にコツソリ下駄箱から靴を取り出して（そこには大量のラブレター〇一二）おいた。

そして、女子達を見つからないように教室が1階であることを利用して窓から抜け出すことに成功した。

ワハハハハ！ざまーみる。俺様にかなうはずがねえんだよ。今日最高の気分で校門にダッシュ。もちろん、玄関辺りで女子達が待ち伏せしているという情報はあらかじめ経験者の隆史から入手してるので、問題なくスルー。

と、校門付近で男子達が取り巻いている様子。遠坂はまだ、教室のはず…。俺は嫌な予感がした。

「あ、陽介！！」

う…予感的中。西城だし。一応今でも好きなんだけど、あんな別れ方だったからあれから会うのが気まずくて、ずっと避けていた。

「よ、よお。久しぶりだな。」

制服姿の西城はやっぱり可愛い。見てて幸せになる。

「ニース見たよ！陽介ってやっぱり凄いね。」

「周りがヘボかったんだよ。」

俺はドキドキと周りの男子からの殺気がなんとも気まずかった。

「実力だよ。あ～あ、私も聴きたかったなあ。それにエミリちゃんいるんでしょ？羨ましきぎ。」

うう…俺の心に西城の笑顔が…。もうダメ、しめる…。

「そんなことより、移動しね？周りの視線が…。」

「アハハ。そんなところ中学校から変わつてないね！」

そういうつて西城は俺の手を掴んで歩き出した。俺のこの心拍数の高さを知っているのだろうか？

「西城も…、あのときから変わってないな。」

「そつかな？でも陽介からメール来なくなつて結構寂しかったよ？」

それって…、いやそんなことないか。なに考へてるんだ俺。

「そうなんだ。でも、俺たち友達だろ？メルアド変えてないんだから西城から送つてくれた良かつたのに…。」

「ん~、なんだか恥ずかしくって。」

ちょつぴり舌をだして赤面する西城。ヤバイ、惱殺される…。

「そつか…で、今日は何できたの？」

「陽介の激励！かな？」

かな？つてオイオイ。俺はあかしくてクスクス笑つてしまつた。

「む~。なにがおかしいんだよお~。」

笑う俺の頬をふにつて指でつつく。

「いやいや。そんな理由で来るなんて思つてなかつたからさ。」

未だに笑う俺にすこしじ機嫌を損なつたようだ。

「もう~！！全国大会、応援に行つてあげないんだから…。」

「え？ 来てくれるの？」

「あつたりまえじゃん！生で聞けるんだよー！」のチャンスを逃すわけにはいかないじやん…！

そういうや西城は遠坂のファンだけ…。なに期待してたんだよ俺…。バカみたいじやん。

「えつとな。確か夏休みだつたと思ひ。詳しいことはメールで送るわ。資料家にあるし。」

「うん。ありがとう。」

くつたいたのない笑顔は今の俺にしたら世界最強の兵器だ。胸が苦しい…。

「俺、これから寄るところあるから、口元で。」

「そなんだ…。じゃ、またね…！」

一瞬顔が曇つたように思つたのは今の俺の心情のせいだらう。何時も通りの笑顔で返されたんだからな。

「おう、またな！」

やつぱり、西城というのは…、辛い。好きな分だけ辛いんだ。

『今空いてるか？』

俺は隆史に電話した。

『あ…お、おう!どうしたんだ?』

『お前の家行つておもつきりギターが弾きたい。』

『…何かあったのか?』

『聞かないでくれ。』

『分かつた。先に行つてくれ。家の方に電話しとくから。』

『悪いな。』

『なにいつてんだよ、今更。じゃあな、後から行くから』

『ふう~,辛いことがあつたら隆史の家に限るな。』

一人まだ落ちる気配のない太陽に向かつて歩き出した。

俺の彼女は…

隆史の家で散々弾きまくつて大体、ふっきれたような気がする。でも、完全に振り切れたワケではなく、一日中机の上で死んだようになっていた。

それでも、自称おれの恋人と名乗る女子達はお構いなくしゃべりかけてくる。それに俺は無言を返事とした。隆史が見かねて女子達をなだめてくれなかつたら俺は多分キレてただろうな。

放課後、一人教室で死んでる俺に如月が声を掛けってきた。

「ようちやん、何かあつたの？」

俺は昨日の事を如月に話した。

「そつか…、ようちやん。私が代わりだつたらダメかな？」

「え…どうい…」

「その…私が西城さんの代わりになれないかな？」

そう、突然の告白。

「如月の気持ちは前から知つてたよ。でも…。」

「好きなら無くても良いの。ただ、ようちやんの悲しそうな顔だけは見たくないの。だから…だから…、そばにいさせて…。」

「如月…。」

「お願ひ…。」

「分かつた。如月がそれでいいなら、俺は構わないよ。」

俺は薄々ながらも如月のことが気になつてたんだ。そう、西城に振られた時も隆史とセツショソした位じや、立ち直れなくて。如月の声で立ち直れた。

でも、隆史の気持ちを裏切りたくなくて。

「ちょっと、隆史呼んで来てくれないか? 一人だけで話があるんだ。」

「分かつた。呼んでくるからまつててね。」

如月はそのままそっと教室から出て行った。静かな学校だから如月が走る足音も響いて聞こえる。

しばらくして教室のドアが空いた。

「なんだ? 話つて?」

「如月のことなんだけど。」

「そつか…。告られたのか。」

「すまん。」

「別に構わないよ。予想してた事だし。でも、一つだけ覚えておいでくれ。」

「なんだ?」

「彼女を泣かせるようなことだけはするな。その時は俺はお前を殴りに行く。」

「やつぱお前は凄いよ…。西城に振られたときも俺はなんにも出来なかつたんだからな。」

「俺は…、俺は…。初めて好きになつて、これからも変わらない女の涙だけは見たくないんだ。」

下を向いて拳を握りしめる隆史。よほど悔しかつたんだろうな。すまん、本当にすまん。

「それにな…、どこぞの知らない男に持つて行かれるよりもやっぱり親友の方がいだろ。チャンスが無くなつたわけでもないんだしな。」

「フ…やっぱお前は強いよ。俺には無い強さがある。」

「ありがとう。」

「お前が礼を言つなんてキモイな。病氣か?」

「んだとテメエ! 殺されたいのか! !」

結局シリアスな雰囲気はどこかへ消し飛んでしまった。そのまま殴り合いになつて、騒ぎを聞きつけた如月と遠坂に止められたけど、お互い満面の笑みだつた。

「なんで殴り合つてたの? しかも笑つてるし。」

山口が不思議そうに俺を覗きこむ。

「関係ねえよ。だよな。」

「そろそろ、気分…かな？」

「こんなことになるんだつたら呼ばなきや 良かつた。」

多少プリプリ如月が怒っていたけど、安心したみたいだ。
ありがとう、如月。ありがとう、隆史。

嵐の前

俺と如月が付き合つてになつて数日。彼女は俺の心の支えになつてくれていた。

俺の気持ちは西城だけど、西城は俺の気持ちに応えてくれずにはいる。正直なところ、この関係は息苦しい。隆史との約束もあり、如月を泣かせるようなことはしまい、と思っているんだけれどやつぱ本気で好きにならなくちゃどうしても傷つけてしまうんだな。

そんなある日、またしても西城が校門にいた。

「もう！陽介のバカ！！」

俺の顔を見るなりいきなりそつこつてきた。俺は何のことか全く分からずにあたふたするだけ。

「大会の日取りメールしてくれなかつたじやん！…！」

ああ～…。

「忘れてた。ごめん。」

「信じらんない！…バカ、バカ。バカ！」

「明日香さん、そんなに怒らなくとも…。」

「一週間も待つてたんだよ？！怒らずにいられないじやん…！」

「よつちやん本当？」

「……。」

俺は知らんフリしてあらぬ方向を向く。

「もう！明日香さん」めんね。」

「なんで早紀ちゃんが謝るの？」

「ようちやんの…彼女…だから…。」

顔を真っ赤にして如月は告げた。

「ええ！…本当？！良かつたじやん。昔から想つてたんでしょ？」

「うん。」

「にしても陽介は幸せ者だな。」

唐突に後ろから隆史が声を掛けてきた。隣には遠坂。

「うわあー！」「ちちやんじやん！」

西城大興奮。

「え…、ああ。ファンの方ですか。」

遠坂も慣れた物。軽くあしらう。

「陽介もいいなあ。トップアイドルと同じ学校・同じクラス・同じバンドだもんなあ。」

「小谷君の知り合い？」

遠坂は怪訝そうに聞いてきた。

「西城 明日香。俺の元カノ。」

「え！ 西城さん？！」

「え？ 何、何？ 陽介私のこと話してくれたの？」

何も知らない西城は大喜びしていたが、遠坂の口は憎しみで一杯だった。

「西城、こんなとこじゃ邪魔だから歩きながら話そつ。」

「しょーがないなあ。」

まずいことになってきた。隆史と如月は西城の事を理解できるけど、遠坂は俺との別れ話しか聞いてないからな…。

「ほら、行くぞ。」

俺はある二人を引きはがすようにして西城を引っ張つていった。

「なによお～。少しぐらい話させてくれたつていいじゃん。」

「遠坂は初対面でなれなれしくされるのが嫌がるんだよ。」

「へえ～、トップアイドルなのに変わってるんだね。」

取りあえず、その場を取り繕う。この言い訳だつたらしばらく効果を期待できそうだ。

「早紀ちゃん呼んでこなくても良かつたの？」

相変わらずの上目使いで少し首をかしげて言つ。

「大丈夫だ。分かってくれていると思う。」

「そーなんだ。ラブラブなんだね。羨ましいなあ。」

「相変わらず、アタックされてるんだろ？」

「女子校に逃げ込めばそんなこと無いと思つてたんだけどね、電車

でしか会つたこと無い知らない子がいきなり告白してきたり、おじさん達の目がね。」

「大変なんだな。」

「私より、陽介の方が大変でしょ？私見てるHIIちやんの目、すぐかつたよ。」

「気付いてたのか？」

「あつたり前じゃん！あの時のこと、話したんだ…。」

「ああ。転校してきて一週間ぐらいでアイツ告つてきたからな。」

「マジで？一目惚れだつたんだあー。やるねえ色男ー！」

西城は肘で俺の脇腹をつついてくる。なんだかくすぐつたい。

「その時に仕方が無く話したんだよ。」

「ふうん。あ、じゃあたしコツチだから。」

「お、おお。じゃな。」

「バイバイ、今夜ちやんとメールしてよー！」

「分かつてるつて。」

俺は初めて西城とドキドキせず話すことが出来た。如月に感謝しないとな。

その晩俺は忘れずに用件だけ西城にメールした。

「ようちゃん！期末前だよ？寝てて大丈夫なの？」

ん？ もう、放課後か

卷之三

朝から一回生

韓から一回も超えては乗ってしまった（こ、こちうわ…）本当に欺かれていた。
言葉に反応せざる終えなかつた。

「あと2日だよ。」

2月 無理だ。
終わった、留年確定。
はい、
死亡。

「ハラスメント」の問題とその対応

「私が勉強教えてあげるから。」

-۱۷-

卷三

「それじゃ、今からさつそく……。」

そもそも分厚い鞄から数学を取り出す。フツ……数学なんぞ「俺の

卷之三

毎日寝るが生天然知りたい。机の上に書いてある。

それでこの解を代入すると

「國語」卷之六

「あ、ごめん。」

如月つてなかなか…つて、オイ俺はこんなキャラじやないんだから

「なんか青春してますねえ。」

ドアにいつの間にか山口がもたれかかっていた。

「いつから見てたんだよ。」

「胸の辺りからかな？」

如月の奴、ますます顔を赤くして下を向く。

「一応、彼氏・彼女の関係なんだからそういうのもアリなんじゃない？」

「お前なあ……。」

「何よ、ずいぶん嬉しそうに鼻の下伸ばしちゃって。」

「う、うるせえよ。で、何だよ？用があつてきたんだろ？」

「あ、そうそう。齊藤君が呼んでたわよ。あのバカ寝てるはずだから起にして部室まで連れてきてくれって。」

「分かった。」

「行っちゃうの？もう少し青春しても私見なかつたことにあ

げるわよ。」

「ほっとけ。」

俺は恥ずかしさと照れくささを隠すように強くあたつた。

「つれないわねえ。なら、早く行きましょ。」

「如月、そういうワケだからちょっと席外すわ。すぐ戻つてくるから、またよろしくな。」

まだ、赤い顔のままコクリと頷いた。

／＼＼＼＼

30分後。ようやく隆史から解放された俺は、如月が待っているで
ある教室に戻った。

「お待たせ。ってオイ。」

机に覆い被さるようにしてスヤスヤ寝ている如月がいた。ん、幼稚園の頃を思い出すな。確かあの時、如月の奴俺のケーキがあつき
いつてダダこねて交換してやったのにやっぱり戻してとか言ってウ
ザかったんだよな。それで、ケンカしていくの間にか寝てやがって

拍子抜けしたつゝ。

昔つからちつとも変わつてないんだな。

「おい、起きろよ。風邪ひくぜ。」

「ん~ よつねやんオハヨ。お田覚めのチュー。」

それは不意打ちだつた。いきなり、両手で顔を捕まれてそのまま…。如月の唇は柔らかくて、甘い味がした。胸のドキドキが止まらない。

「エへへ。GET、GET!!」

無邪氣に喜んでいる所を見ると本当に寝ぼけているみたいだ。正直こんな寝ぼけ方されると困るんだけどな。まあ、無かつた事にするか。

こんなんで期末、無事に切り抜けれるのかな?

まだ後ろで二へ二へ笑つてる如月をほつといて沈む夕陽に問い合わせてみた。

kiss (後書き)

お世話かけました。
なんとか体調はもどったものの、これからバイトです。また遅くな
りそうです。

夏休み

なんとか無事に期末を終え、全国大会に向けて練習する俺たち。学校の中もとい、マスクに注目されているのだからそうそう手を抜くことができない。それで、夏休みに突入しても学校に集まつて練習しているのだ。

「あ・つ・い。」

「ようちやん、溶けてる…。」

クラークをガンガンに掛けているのだが年代物のようで、効果が感じられない。熱い、熱すぎる…！

「ヤバイ。溶ける…。」

「冗談ではない。親指が…。汗だ。」

「小谷君。タオル。」

遠坂が気を利かせてバスタオルを持つてくれた。すでに俺持参のタオルは汗を吸いまくつて濡れ雑巾と化している。

「サンキュー。」

俺は「シゴシと全身の汗をふき取り、ギターへ向かう。

「そんな汗だらけの手で、触らないでよ。弦が錆びちゃうじゃない！」

練習しようとして、ギターに手を伸ばそうとしたとき山口がギターを退避させた。

「あ〜？」

「弦張り替えるの大変なんだからね…！」

「触らなくちゃ弾けないだろ。ホラ、よこせ。」

ふう。髪から汗がしたたり落ちる。毎年この季節になると体重が10kg減るんだよな。熱い。

「ダメだって！汗まみれの体で来るな…！」

へっふっふへ。壁まで追いつめたぜ。あ〜小娘、ギターをよこせ。

「なにやってんだお前は。」

例によつて隆史の拳が飛ぶ。ざつやうら俺が襲つているよつて錯覚したらしい。

「あ～？何すんだよ。」

「夏用のギターあるだろ？」

「あ～そついえば…。」

中学の時、隆史の家でも汗まみれになつていた俺に隆史は夏用のギターとかいつて、ギターを一本くれた。なにやら特注品ぢしくて、弦の張り替えが容易にできるらしい。

「俺んちに放置してあるから、わざわざ持つてきてやつたんだぜ。」

「俺は元気を取り戻し、さつそくアンプにジャックをセットして試しに弾いてみる。

ん～、相変わらずいい音出すなw

「やるか。如月、歌詞の方は出来たの？」

「う～ん、ちょっと怪しい部分があつて…。曲弾いて貰えない？」

早速、セッションに入る。

俺と息ピッタリ。いつものギターなら汗で滑るんだけど、コイツには特殊加工を施してあって無理なく弾けることが出来る。

初期の如月の頼みなんてドコ吹く風。気を遣つことなく猛烈に練習した。その間、女性陣は作詞にかかる。

引き続けること3時間。野球部とかの連中の声がいつの間にか聞こえなくなつていた。

「隆史。」

「ん？」

「アイス。」

「ねえよそんなもん。」

「買って来いよ。」

「自分で行けよ。」

「溶ける。」

「……。」

この時の溶けるは汗でアイスが溶けるって言つ意味だ。

「しようがねえな。今回限りだぞ。」

そういうて隆史は部室を出て行った。俺と隆史は体のつくりが根本的に違うらしく、アイスはどんな環境でも汗一つ流さない。ま、それが夏の女の子にモテる理由の一いつでもあるわけで…。

「買つてきたぞ。」

「はや…！」

実質3分。足つて買つてたらしく息が荒いが、汗一つかいてない。
お・恐ろしい…。

「ほれ。アイス。」

先に歌詞を制作中の女性陣にアイスを渡す。

「――齊藤君ありがとう」

とびっきりの笑顔でお礼を言われている隆史はなんだか嬉しそうだ。

「お前、バニラだろ？」

「良く分かつてんな。」

「何年親友してんだよ。」

「今年で4年目だろ？」

「つるせえ。」

こつして俺たちの夏休みが減つていくわけだ。

全国大会へ

とつとつ全国大会前日。正直言ってマスクやらが取材といってしつこく俺たちを付きまとつのだ。本当にうざがつかる。

「小谷君、今の心境はどうかな？」

いつかの女リポーターが目を輝かせてインタビューしてくる。だるい、だるい。

「普通です。」

「緊張とかしないんだ。過去に大きな大会とか出たことがあるの？」

「無いです。」

「その割には落ち着いてるね。そうだ、今日の意気込みを聞かせてくれるかな？」

「うぜえ、うぜええ、うぜええ！…学校という顔がないのなら、カメラをたたき壊してやるのに…。」

「何時も通りです。」

「そう、何時も通りの素晴らしい演奏をしてくれるのね！期待してるわよ。」

なにをどう解釈すればそういう風になるんだ？！てか、あんたに期待されてもな。

「そうそう、遠坂さんの最近の調子はどうかな？」

「さあ？本人に聞いた方が早いんじゃないですか？」

「小谷君から見てどうか聞きたいんだけど。」

「何時も通りだと思いますよ。」

「元気いっぱいのライブでの遠坂さんが見れるワケね。楽しみだわ。そもそも行かないといけないから。またね。」

激しくウザイ女リポーターは穏やかに笑つて（鳥肌が立つた）カメラさんと去つていった。編集してどんな内容にしてくれるんだろう。

ふう～だるい。新幹線に乗るまでビーッしてこんな事に付き合わなく

ちやならないんだ？

俺は神を恨みながら到着する新幹線に乗り込んだ。

さて、どうして俺が一人なのかというと…

篠山の野郎が、担任という地位を利用して俺たちを引率すると言ったのだ。遠坂と一緒にいたいという下心見え見えの40後半のバークード頭の言うことはもちろん断固拒否。俺たちの交通費を出す学校側も引率と言うことになれば当然篠山の交通費も支給されるわけで、諸経費を抑えたい経営陣も拒否。しかし、篠山の奴、諦められなかつたのか校長に自腹裂いて行くと言つことを言い始めたわけだ…。俺はそんな篠山を出来るだけの敬意を込めてロープで縛り上げ、せめてもの慰めに女子更衣室の天井から吊す作業をしていたのだ。それで遅くなつたつて言つわけ。

幸い俺の座席は窓際で今頃篠山は見つかつてるんだろうか、なんて考えて一人ニヤニヤしていた。

「お！陽介この電車だつたんだ。

なんと上機嫌の西城が…なんでも？？そんな偶然つてアリ？

「つて何で陽介だけ？」

俺は先ほどのいきさつを手短に話した。

「なにそれ？キモイ。」

ありがたいことに西城も俺と同じ結論に達してくれたようだ。

「だろ？それで遅れたつてワケ。」

「なるほどね～。」

「それより、俺の横座つていいのか？」

「誰もいないんだから問題ないんじゃない？」

「そつか、問題ないか。」

「それよりもう、お昼だよ？」

そういうえばそうだな。

「何も買つてないからイイ。」

「そんなのダメだよ。ほら、私のお弁当あげるから。」

そういうてバツクを「さー」としているかと思うと小さな弁当箱が出

てきた。

「西城のぶんなくなるだろ？それに売店あるから行けばいいし。
『そういうて結局はいかないつもりなんでしょう？』

ギクッ

「そんなワケないだろ。」

「私が買いに行くから、その間食べてて！」

なんだか強引だなと思いつつ久しぶりの手料理に舌鼓をうつ。
この卵焼きの…

などと考えていたら西城が戻ってきた。てか、早い…

「はい、足りないと思うからおにぎりも買つてきたよ。」

そういうつづばかり俺の膝の上に置く。

「料理の腕上げたな。」

「分かる？最近、自分でも成長したなって思つてたんだ。」

楽しそうに俺の横で話す西城にチクリと胸が痛かった。

全国大会へ（後書き）

「んにちは。

ケイです。青春謳華、いろんな意味で終盤に向かっております。別、小説「君と僕の生きる道」を連載開始しました。12話の短い話ですが、青春の合間に書いた前編シリーズの恋愛物（？）です。良かつたらご覧下さい。

まだまだ、バイトが忙しく、書けたり書けなかつたりと不安定な日々を過ごしております。

どうか、温かい田で見守つてやってください。

自答

巨大なスタジアムの中、既に開会式が終わり一組目が歌い始める。昨日はそのまま西城と一緒に駅で待つてくれたみんなと合流し、ホテルへ直行した。まあ、ホテルだけあって遠坂ぐらいしか練習できなかつたんだが…。

「なかなかやるわね。」

「そうか？予選と変わりないよつに思えるが…。」

「あんたのレベルが高すぎるからよ。」

そう軽く山口に一蹴りされた。

出場地区がヘボかつたんだろう。

「陽介、期待してるよ。」

西城が気を利かせてくれたらしく、軽く俺を慰める。

うお…如月さんの視線が痛い…。（涙）

でも…正直なところ俺は未だに西城が好きだ。こんなところで不本意ではあるが、如月には応えることが出来ない。

甘い、甘い初恋の相手＝西城。

俺の心には彼女しか住んでいない。だけど…そう、彼女は一生俺を…男を好きにならないと言つた。なにか過去に辛いことがあつたんだろうか？

例え何かあつたとしても、それでもいいんだ。俺は西城が好きなんだから。悩みとか全部抱えて包み込んでやる。一生片思いでもいい。だけど如月のことを思うと、胸が痛む。俺のことを考え、気を配つて来てくれたんだ。幼稚園の頃から何一つ変わつてない如月。昔は活発で友達も多かつたけど、多分…俺を、俺だけを見つめるようになったて周りに目が行かなかつたんだろう。それで今の状態になつたんだ。全部俺のせいじゃねえか。アイツの人生狂わせたのは…。だけど、俺は…俺は…

この大会が終わつたら、俺の気持ちを彼女にちゃんと話そう。彼女

なりやつと分かつてくれる。俺をずっと見守つて来てくれたんだから。

『偽善』

ふと、俺のドコかで声がした。

『偽善じゅねえのか？結局はアイシのこと傷つけてよ、泣かすんだらいい』

俺は自答する。

そんなつもりじゃねえ。

『だつたりびつこつもつだよ。』

このまま西域を想つて、如月に振り向かずに辛い目にあわせるのが可哀想だからだ！！

『可哀想、可哀想つて。一番そんな思いしたくないのはお前だろ？だから偽善だつつってんだろ！！いい加減気付よバー！』

偽善…なら俺はどうすればいいんだ…ビツすればいいんだよ…！…！

「…………」

隆史に肩を揺ゆぶられて、思考の渦から引き戻された。

「あ？何だ？」

「何だじゃねえよ。つたく…。そろそろ俺らの番だぜ。」

「え？」

確か俺らは最後の方じゅ…。

「お前ずっとと考え事してただろ？　何も声掛けても反応しないじゃん？」

妄想？

「つむせえよ。そんなんじやねえ。」

俺は彼女達のことから、一人のミュージシャンとして切り替えた。

自答（後書き）

更新遅くなつて申し訳ございません。

挨拶回りと、忙しく立ち回っていました。

ん~、アシスタントが欲しい!!と渴望した時期でもありましたw

皆様、これからも『愛読よろしくお願いします

控え室に向かい、最後にリハーサルを行へ。

「陽介、調子わりーの？ キレが全然ねえぞ。」

「あ？ いつも通りだぜ。お前の耳が狂つたんじゃねえの？」

「だと良いんだかな…。俺はな、この一回に全てを掛けてるんだ。俺の夢、お前と…今は遠坂も入ってるけど一緒にメジャーデビューしたいんだぜ。」

「知ってる。いつもブチブチいつてるじゃねえか。」

「俺の夢が掛かってるんだ。来年も、再来年もあるけど。俺はこの一瞬に全てを掛けたい。」

「そんなこと、ここにいる奴ら全員だろ？」

「俺らの後ろで話を聞いているのを指さした。

「分かつてゐるんだがな。お前のギターに魂が入つてない。なにか雑念でもあるんじゃね？」

さすが、隆史。一瞬で読みとつたか。あなどりがたし。

「は？ 気のせいじゃね？」

「そつか…。」

「ホラ、始まるぜ。」

係員が舞台でスタンバイするよつに指示してきていた。

「おひ。」

俺たちは予選の時よりも遙かに凄まじい熱き戦場に繰り出した。

俺たちが舞台上に上ると、さつきとは一変。会場の空気が変わった。さんざんマスコミに煽てられた俺たちだ。その実力がホントの物なのか見極めたいのだ。

「泉ヶ丘高校の皆さんでオリジナル曲GAL^{ガル}です。」

司会が紹介をすまし、俺は隆史に目で合図を送る。

ここは戦場、恋愛感情とかは全て捨てなければならない。俺は…捨てきれるのだろうか…？

俺がスローバラードでリードする。隆史はそれに合わせ静かにリズムを刻む。

G A L L

夜の新宿、ギターを奏でる者一人
孤独を聞き手に歌い続ける
彼は彼女を捜しにやつてきた
突然去つた彼女を追つてきた
居場所は分からぬけどこの歌が探してくれる

作詞作曲はや半年
彼は新宿名物ガル

彼の歌声は人を引き寄せ 大きな円陣を作る
時に警察にしようびかれ
ヤクザ相手にケンカした
しかし彼女はいない
半年掛けても彼女はいない
遠く離れた異国に行つたのか?
俺に教えてくれよ

ミズキ!!

ああ夜空の星々よ
お前達は俺に代わつて見守り続ける
俺は疲れてきたよ
いい加減居場所を教えてくれ!!
長い長い夜を…

ミズキが好きな月に見守られ
長い長い愛の歌を

君に届かないと知りながらも 歌う…

いつもの新宿

ガルを囲む人垣

ふとその中に懐かしい笑顔

「ミズキ！」

ギターを投げ出し追いかける

「俺を置いていくな」

「探したんだぞ」

しかし声は届くことなく幻影は去る

悲しい悲しい愛の歌

彼は冷たい姿になつて見つかつた

悲しい悲しい真実

ガルの想いは届き

毎晩彼女は聞きに来た

星々は一人を見守つた

今度はガルが彼女を見守るとき

星の一部になり彼女を見つめ続ける

夜空を見上げればホラ

今日もGALは輝く

悲しい歌詞、それに合わせたようなスローバラード。今までの会場の雰囲気を一変させた。遠坂の歌声はどのくらい、この会場に届いたどうか？

この歌詞の意味を西城は理解してくれたんだろうか？

俺は刹那の思考の中、会場の反応に驚いた。

拍手がない…

遠坂も不安そうにしている。ミスったか…

と、ちらほら拍手が上がったのを皮切りに万雷の拍手に変わった。さつきまで熱心にカメラを回していた報道陣も拍手をしている。会場を俺たちが支配できたんだ。そう思うと少し安心する俺がいた。

「素晴らしい演奏ありがとうございました。」

司会者が「帰れ」と指示をする。もう少しこの拍手に浸っていたかった。

控え室に向かつて、次の組がやりにいくとしていた。そう、富竹の名城だ。

「相変わらずの巧さだね。後の人のこと少しは考えてくれないと、困るよ。」

富竹は俺たちに向かつて話しかけてきた。

苦笑いで返す俺たち。

「優勝は多分君たちだらうけど、僕らも君たちに負けないような演奏をするよ。」

「期待してるぜ。」

富竹はスポットライトへと向かつて移動し始めた。俺たちは元の座席に移動する。

「陽介！すごかつたよ～。」

西城は甘えたような声で話しかけてきた。

ん～、ちあわせ～

「H//ちやん、やつぱり歌上手いな～。私もそんな風に歌えたらな

う。

「そんなことないよ。練習すれば西城さんも歌えるようになるって
！」

「だといいんだけどね。」

ちょっぴり舌をだして微笑む西城。

ヤベエ…たまらねえ～。一言…

萌え～

「…すけ、オイ！」

妄想の渦から俺を引っ張り出すように隆史が俺を呼んだ。

「お？何だ？」

「テレビ曲の奴らが話があるってや。」

「ハア～？興味ないって伝えといて。」

「小谷君、話も聞かずにそれはないんじやないかな？」

ふと顔をあげるとサングラスをした…俗に言うイケメン？（そこいら辺微妙なルックス）の兄ちゃんが声を掛けてきた。

「誰？」

「テレビ局の人。」

「あつそ。」

「……。」

「W秒殺！」

「あ、柳さんじゃないですか！！」

遠坂がイケメン？兄ちゃんを見て異常に興奮し始めた。

「遠坂、柳つて言つ人？の知り合い？」

「うん。ゴールデンタイムの音楽番組のプロデューサー。凄腕で通つてるんだよ。」

「へえ～。興味ナシ。」

「……。」

「ちょ w 興味ナシって。最後まで人の話聞こいつよ。」

すっかり焦つている柳さん。見ててチョーおもしろこし。

「ん？じゃ、話つて何？」

「テレビに出演してみないか？」

「「「は？」」「」

遠坂+隆史+俺のハモリ。

「確かに君たちEDENってバンドだつたよね？ EDENで出てみないかい？絶対人気でると思うんだけどなー！」

熱弁を振るつ柳さん…。

「俺バス。面倒くさい。」

「んじゃ、おれも。陽介いないと意味ねえし。」

「私は…遠坂エミで出演してるから…。」

「いやいや、エミちゃんと齊藤くんの理由は納得できるけど小谷くん、面倒くさいってのは…。一応メジャーでビロー田端してるんじやないの？」

「俺は趣味。デビローなんて面倒くさそうだからヤダ。」

「えええええ…じゃ、どうしてこの大会でてるのか…。」

「校長の陰謀」

ハモリ一同、先ほどと同様 w

あひやひや。柳さん頭抱えてるよ w

「陽介?」

「ん?」

「ちょっとといいか?」

「あ?」

隆史は女子が女子だけの世界に浸つている間を狙つて俺に声を掛けってきた。そして付いてここと言わんばかりの仕草。なんだ?なんだ?

連れて行かれたのは、会場から少し離れたところにある公園。

「お前…やっぱり西城さんの事が好きなんだろ?」

いきなり本題かい!!(汗、汗)

「そ、そりや…なあ…。」

「如月はどうするんだ?」

ああ、そのことか…

「ちゃんと俺の気持ちを話す。」

「そうか…。」

「気持ちがないのに、アイツといったってアイツが辛いだけじゃん。俺は…幼馴染みとしてアイツの辛そうな姿は見たくない。それに、俺の気持ち気付いてるよ。」

「気付かないフリしてるんだろ?」

「そうだな…。見ててなんか…俺も辛い…。」

「俺な。このままの気持ちで如月と付き合つのは可哀想だと思つてたんだ。」

「ん?」

「もし、お前がそのまま付き合つて言つのなら俺は…お前を殴り飛ばそと思つてた。」

「笑えるぜ…。」

「初めに約束したよな。泣かせるような」とが合つたら殴りに行くつて。」

「覚えてるぜ。……殴るのか？」

「いや。今はそんなつもりはない。」

「俺はな、本当は如月みたいな奴はお前のよつた奴と付き合つた方がいい気がするんだ。アイツが俺に抱いてる気持ちってのは恋愛とかそんなんじゃなくて、なんて言うのかな……いつも守つてくれる兄貴みたいな感じでしか見てないと思うんだよな。それを好きだつて誤解して、辛そうにしてた俺を励まして……」いつこいつ形になつたんだろうな。」

「……。」

「お前はいつからだ？」

「お前と付き合つよつてになつてしまはしくしてからだ。いつも陽介に向かつてはキラキラ瞳を輝かせて笑うのに、他の奴らには何でそういう表情しないんだろうって不思議に思つてや。しまはしく見てたんだよ。そしたらさ……なんか俺に似てるよつた気がしてや……。如月の笑顔見てたら落ち着くんだよ。それですんげえドキドキして、心臓止まるんじゃないかつてマジ焦つたよ。」

「長かつたな……。」

「ああ……。本当は……本当は……お前が羨ましくって仕方がないんだ……ぜ？」

「なんでだ？」

「思つんだけども……。」

「思つんだけども……。」

「ん？」

「お前の想い届いてると思つた……。」

「慰めんなよ。らしくないぜ……。」

隆史は辛そうに下を向いた。

そんな風に俺を…如月を見てたのか…。

辛かつたんだろう…。

苦しかつたんだろう…。

俺が…ここ数ヶ月感じてきた苦しさをマイシは…マイシは…4年も内に秘めてたんだな。

こんな俺だから口には出さないけど…。態度にも出せないけど…。

すまなかつた…。

羨望（後書き）

学校も始まり落ち着いてきたので、3話目です。

それでも手直しとかいろいろあり、3話までしか書けませんでした
。：

精進していくのでこれからもう少し愛読お願いします。

（募集）

アシスタント・小説ネタ提供・歌詞及び歌詞のテーマ・扉＆挿絵を
募集しています。

我こそは！！と思う方はメールお願いします。

x x x h o l i c 0 5 2 3 @ y a h o o . c o . j p

まわかの、まさか？！

俺と隆史が会場に戻ったのは夕暮れだった。

まだその後、お互いの事や昔話に花を咲かせて笑い合っていた。

なんだかんだ言っても俺たちは…腐れ縁みたいだからな（照れ笑い

「も～ドコに行つてたのよ～。捜したんだよー！」

頬を若干膨らませた西城が俺の胸元を叩きながら言つた。

「暇だつたから隆史と公園で遊んでた。」

「暇つて…！表彰式も全部終わつたんだよー！」

「マジ？！」

「大マジだよー！一人いなくてエミリちゃん一人でステージに上がつて恥ずかしそうにしてたんだからー！」

「遠坂、悪かつたな。」

「もういいですよ。過ぎたことなんだし。その代わりと言つたらなんんですけど…。」

語尾が尻すぼみになつて最後の方は聞こえなかつた。

「なんて？」

「柳さんのテレビに出演することになつましたー！！ー！」

「マジですか？」

「はい。」

チーン。

終わった…。

「ようちやんドンマイ」

如月はなんだか嬉しそうに言つてゐる。

「俺は…俺は…いかないからなーーー！」

「ちょっとなんで？！」

「俺はそんな話、承諾しちゃん！！」

「でも契約書にサインしてきちゃったし……。」

……

「一ついいか？」

「ハイ。」

「出演日いつ？」

「9月14日です。」

「その日文化祭だよ。アヒヤヒヤ。」

隆史！ナイス！！

顔面蒼白の遠坂、困惑気味の如月、知らないフリしてる西城。

お…おもしれえ…

「で、でも…夜ですし…。」

「あら？明け方まで大宴会だよ。アヒヤヒヤ。」

隆史の奴…残酷だな。

ま、おもしろいからいいんだけどな…

おもむろにケイタイを取り出した遠坂は、電話し始めた。

「遠坂です、先ほどの件で…ハイ…今予定を確認したら文化祭みたいで…ハイ…ハイ…ですが夜は宴会らしくて…え？本当にですか？！ありがとうございます。…はい、よろしくお願いします。」

電話を切った遠坂は勝利の笑みを湛えていた。

「今柳さんに連絡したところ特別に、文化祭の野外ライブを撮影して下さることになりました。これで大丈夫です！」

チーン。

今度こそ終わった…。にげれねえ…。

ハツ！仮病！そうだ、これだ！！

「あ、病気でも撮影を強行するそうです。」

読まれた……。○rz

本当の気持ち

大会も無事終わって俺たちは宿泊先のホテルにいる。結構高そうなホテルにしてくれたのは校長の多少の善意だろう。そんでもって晩飯どき。

みんな美味そうに食っている。俺は頃合いを見計らつて如月に声をかけた。

「後で、一人で話があるんだけど…。」

「ココじゃいえないの？」

「おう、ちょっとな。」

「分かった。」

俺はこれから言ひごとを考えると、どうしても如月の目を見ることが出来なかつた。

これから俺は…如月に参いごとを言わなければならぬ。
お互いのために。

食後、自由行動と言つことになり各自好きな所へ移動し始めた。
俺は如月にそつと田代命図を送り、付いてくるように促す。

「話つてなに？」

誰も来なさそうな非常階段の辺りで立ち止まつた俺に如月が尋ねてきた。

「俺の気持ち知つてるよな…。」

「私じゃなくて西城さんが好きなんでしょう？」

「あ…。俺たち…お互いのために今の関係を無くした方が良いよう思つんだけど…。」

「私は…私は…ようちやんのそばにいたい…。」

「でも俺は如月を愛してやれない。気持ちは西城のままなんだ。こ

のままじゃ、俺だつて如月が辛い思いをしていくつて考えただけでも申し訳ないし……それに、お前を泣かすわけにはいかない。コレが俺が出した最善の答え。…………終わりにしよう。」

如月は大きく目を見開いて声を殺して泣き始めた。

「私……ヒッグ……しつ……しつ……失恋……しけやつた……んだね……ヒッグ。」

「お前の気持ちは……恋愛とは違つと思つんだ。」

「どう……いう……こと……？」

「俺たちの家が近いこともあって昔から色々お互に支え合つてきたじゃん。小学校に上がつて、いじめられたのをきっかけにあんまり人と話なくなつてさ。その……俺だけしか見てなかつたから、お前は俺のことを見面倒見の良い兄貴がなんかそういう感じの好きであつて恋愛感情とかとは違つような気がする。」

「そんな……ことない……よ。」

「だつたら、西城の代わりでもいいつて言つたのはなんでなんだ? 本気で俺を好きなら……西城に嫉妬するはずだろ? でもお前は違つた。西城の代わりになりたいつて言つたんだ。俺はそれでなんとなくお前の抱いてる気持ちが少し見えたような気がした。それに、俺が西城と仲良く話してたつて、お前怒らなかつただろ? 普通好きな相手が自分以外の異性と仲良くしてたら嫌だつて思つモンだぜ。俺だつたら……今でも西城のことが好きだから……他の男と楽しそうに話している姿を見るのは耐えられないよ。」

「そつか……私の……思つてた……気持ちつて……よしけちゃんの言つとおり……かもしれないね。」

「それじゃ、終わりにしてくれるのか? また、昔みたいに幼馴染みでいてくれるのか?」

「うん。これからもよろしくね。」

顔中涙でくしゃくしゃになりながら、最高の笑顔を見せてくれた如月……。

俺は本当に辛い思いをさせたんだな。でも、これから先ずっとこの

思いが続くんだと思つたら、今口口で終わらせたのは良かったのかな？

「すまないな。」

「そんなの気にしなこよ。みひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

するもん。」

「そりか、期待してるよ。」

「私トイレに行つてくるね。」

如月は俺の返事を待たずに対面のそばから離れていった。

一つ重荷を降ろしたら、更にひとつ重い重荷が俺の背中に乗っかってきたようだ。

本当の気持ち（後書き）

今回は早めに更新できました。

不定期更新なので、いつもチョックしに来てくれる方、本当にすい
ません。○へ

予定的にはだいた中盤？辺りですが、都合により話のペースが上が
るかもしれません。とりあえず70話辺りを目標して頑張ります！！

P . S .

まだまだ募集しています。

我こそはー・と思う方、是非是非♪連絡下さい

x x x h o i c o 5 2 3 @ y a h o o . c o m . j p

新学期そつそう、下駄箱の中には大量のラブレター。それもどれも同じように夏の大会で惚れてしまつた、つていう内容。ただ、友達に自慢したいが為のラブレターだと判断し、即ゴミ箱へ。「なんだ、やっぱりお前も貰つたのか。」

後ろを振り向くと隆史。

「だな。お前の方も？」

「ああ。今朝から追っかけがひどい。テレビ局の奴らまで来る。」

「お前はイケメンだからな。」

「お前は不愛想だからな。」

「不愛想で悪かつたな。」

「そんなお前でも告りれるんだから、世の中分かつたモンじゃないな。」

「なに先輩風吹かしてんだよ。」

「だつて、こいつの初めてなんだろ? 小谷くん。」

「お前だつてテレビ局の連中にまで追われるのは初めてだろ? が。」

「それはそうなんだけどね。」

「コラコラ、いつまじやべつてるんだ!! とつくにチャイムは鳴つてるだろ!! ちょっとテレビに映つたからつて調子に乗つてるんじゃないぞ!!」

新学期そつそうの篠山…。マジキモイ。

てか、夏の間にハゲが進行したんじゃないのか? ほとんど…いや前面髪の毛がないぞ!

「さつさとすわらんか!!」

「たぐウルセーな。」

俺はしぶしぶ自分の席に着いた。隣の女子を見ると顔を真っ赤にして俯いてくる。

「さてさてさて、早速だが文化祭の出し物を決めなくなりやな。なんか意見あるか？」

そういうながら篠山は黒板に教師とは思えない案を書きやがった。

メイド喫茶

「…………。」

教室内のテンションがじょじょに上がりこつたのに一気に - 18 0 の極寒に突き落とされた。

「ん？ 意見がないならコレで決定にするぞ。」

どうも「イツには羞恥心というものが無いらしい。」

とたんに女子が手を擧げる。

なるほど、余程嫌なのか…。

「お前。」

4ヶ月たつのに未だに名前覚えてないのかよ…！

「EDENの皆さんの野外コンサート。」

ふうんコンサートねえ…。

「つてちょっとまたあああああ…！」

普段愛想の無い俺が突然叫んだのに驚いたのか、クラス全員（隆史 & 遠坂 & 如月除く）が俺を凝視した。

「部活でやるから、却下。てかギャラもねえのに炎天下の中やりたかねえ。それに面倒くさい。」

「お前一個人の意見なんぞ反映されんわ！ それに遠坂の美声を聴く機会が減るだろつー！」

「うは…本音でたよ本音…。遠坂嫌そうな顔してるし…。

「他にないか？」

「ハイ。」

俺

「まだあるのか？」

面倒くさそうにこいやがつて（怒

「焼きそば・たこ焼き・ラーメンの屋台・その他食い物屋。」

「この辺りが一番妥当だろ？。

「ん？？？篠山の奴、なに考えてんだ？」

「悪くない…、遠坂の接客姿も悪く無いぞ…。」

「なにボソボソと危ないこと言つてんだよ。こいつ本当に教師か？」

「お前の意見は保留にしておこう。」

「そういう黒板に飲食店と書いた。」

「他に…。」

1時間後、大議論の後クラスの男子は女子に言い寄られて俺たちの野外ライヴに賛成して…。○△
言わなくても分かるよな（涙）

文化祭の準備

あ～だこ～だしていろいろひに文化祭まであと3日。学校は文化祭ムード一色でいつもより活気づいている。

俺たちは野外ライヴから室内に移動した。遠坂が「熱中症になつたり、日焼けしたりしたら先生どうやって責任取つてくれるんですか？」と言い寄つたからだ。どうやらこの作戦で中止にしようとしたらしいが、篠山の奴は校長に売り上げの30%を納入することを条件に特別に文化祭開催期間中、体育館を使用できるとんでもない权限を獲得してきた。

もうなんていつたらいいのや～。

あ、ちなみに俺たちのギヤラはないから～

「小谷くん！～」

回想にふけつている俺にあの時、野外ライヴの案を出した……（名前喪失。）女子が声を荒げてきた。

「な、なんだよ？！」

「練習の方、しなくても良いの！～？？」

「なんだ、そんなことか…。

「全然大丈夫だ。気にする必要なんかないぜ。」

「一体何曲歌うつもりなのよ！～」

「3曲ですが？」

「！～！たつた3曲？！～？」

「必要に応じて作つてるだけだからな。ストックはそんなにないのか。それに、文化祭のために余計に2曲も作つたんだぜ。俺は1曲でいいって言つたのに…。」

「1曲聴くだけで入場料500円も取れないわよ！～」

彼女は苦笑混じりに言つ。

「3曲だからいいじゃん。」

「もう……」

怒つてどつか行つてしまつた。なんか俺、怒らせることしましたか？

「陽介、なんだ教室にいたのか。」

と、隆史登場。

「やることないからな。」

「体育館にいつてステージ見てこいよ。多分、お前卒倒するぜ。」

マジ？

俺は隆史に連れられて問題の体育館に…。

うう、寒氣がする。扉の隙間から禍々しい気が…。

ガラガラ

俺の目の前に広がつた光景は…。

ステージのバックに垂れ幕がかかつてゐる。垂れ幕自体は良しとしよう。でもなんで露骨にハートマークがついて。"LOVE" 陽介

"つて書いてあるの？

てか、俺のアコギ（アコースティック・ギター）に妙なフリフリが付いてゐるし。しかもマイクには特大のリボン…。

まさしく、女の子バンドが好きそうな設定になつておりますな…。

「陽介、生きてるか？」

「今、生死の境を彷徨つてたところだ。」

「どうする？」

「全部外す。」

俺はドシドシと舞台上に上がり、盛大に飾られた俺の聖なるアコギを救出。

次はあのふざけた垂れ幕の切除に…向かおつとしたら、女子の猛抗議にあつた。

「ちょっと小谷くん……にしてるのよ……！」

「…こんな恥ずかしい舞台で、できるかよ…」

「可愛いじゃない！恥ずかしくなんかない！..」

「可愛くもないんだ！俺はこんなのは嫌だあああ

俺の必死の抵抗が功を奏したのか、後日男子陣が考案した垂れ幕に

女子のパワー感るべし…。

文化祭前日

今日は文化祭前日。

クラス一同ビラ撒きに励んでおります。

特にメインとなる俺らは5人揃つて駅前で笑顔振りまきながら、ビラ撒いてます。

どうやら、若い子は俺たちのことを知っているようだ、しきりに握手手を求めてきたり写真撮影を強行してきたりした。

特に遠坂の知名度は凄まじく…（といつてもやはりトップアイドル）男達に絡まることがしばしば…。その度に俺と隆史が救出を試みる状況がループの様に続いております。

と、田の前に止まるのは一台の車。もしやと思いつい警戒していくと…やつぱりテレビ局の連中。

あのうざつたいたいリポーターの姉ちゃんがコッチに向かってくる。

「今噂の、泉ヶ丘高校軽音楽部、EDEENの皆さんです。」

撮影許可しないのに堂々と取材を始めるリポーター。

「ここにちは。今、なにをしているんですか？」

テレビ局の連中が来ているので何事かと人垣が更に膨れる。

「明日学校の文化祭なので宣伝にビラ撒きしてたんですよ。」

むすつとして答えない俺の代わりに隆史が愛想良く答える。

「文化祭と言えばゴールデンの某音楽番組が取材に来られるというですね。」

「ええ、全国大会でオファーが来たんですよ。」

「緊張したり不安になつたりしませんか？」

「国ではあまり緊張しませんでしたが、撮影当田は緊張すると思いますよ。」

「メジャーでビューするつて言つ話もあるよつですが。」

「その辺の話は俺たちまだ高校生なので決めかねています。」

「将来はやはつこのメンバーでミュージシャンになられるんですか？」

「僕個人としてはこのメンバーで歌つて行けたらいいと思つています。」

「貴重なお時間ありがとうございました。宣伝の方、頑張つて下さいね。以上、現地の藤原でした。」

そうか、この姉ちゃん藤原つて言つのか…。あとで柳にチクつてなんとかして貰おう。

強制的に行つた撮影が終わつても礼一つ言つことなく帰つていつた。まったく、失礼な奴らだぜ。

とたんに人垣が俺たちの持つていてるビラを奪い始めた。どうやら、こいつら来る気まんまんらしい。少しでもテレビに映りたいっていう野次馬根性全開だ。

ダンボール箱1箱あつたビラは瞬く間に無くなつた。これを良いことに学校に帰還。

しかし、校門の前では野次馬達がウロウロしていだし、別のテレビ局の連中もいた。

ここは…こういう非常事態は…。

無断で帰宅するに限る。

ついに来てしまった魔の文化祭。

朝早くから校門の前で列を作つて開門を待ちわびている野次馬が凄い！

朝登校する時なんて、野次馬から歓声が上がつたほどだ。

んで俺らはとつと、開会式にも参加させて貰えず、体育館の控え室で待機させられている。

「遠坂、あんまり張り切つて歌うなよ。持久戦になるからな。」

「うん、私のことよりもふたりは大丈夫なの？疲れるでしょ？」

「その辺りはなんとかするさ。」

正直、疲れは目に見えている。最初から少しばかりの手抜きでやつていかないと、午後は倒れてしまつ。

「準備はイイ？」

どつやうじこの男子は学級委員と面つらいで俺らの世話役になつてしまつたらしい…。ドンマイ

「東くん、ありがとう。」

ほう、この男名を東あずまと申すか…。今日だけは覚えておいてやう。

「そろそろ一回目始まるよ。舞台上に上がつて。」

暗い舞台を観客に気付かれないよう上うがつていく。

「お待たせ致しました。EDENの皆さんです。」

盛大な拍手と共に、スポットライトが俺らを照らす。あちこちから歓声が上がる。早くも観客達はテンションを上げ始めたよつだ。

「皆さん、おはよつござります。」

遠坂が営業スマイルで挨拶する。

「私たちはまだ結成したばかりなので、オリジナル曲のレパートリーがあまりありません。来て頂いた皆様には3曲だけ、最高の歌を

プレゼントしたいと思います。初めに”片思い” 聴いて下さー。」

遠坂は振り返つて俺たちに合図を送る。
俺は静まり返つた会場の静寂を静かに破る。

片思い

片思いしている自分がいた

相手も薄々気付いているみたい
素っ気ないアナタの日常の仕草

恋する乙女はそれだけでも胸がキュンとする。

告白なんて怖くて出来ないよ

返つてくる返事が怖くて

なかなか言い出せない。

この想い アナタに伝えられたなら
どれだけ胸がスッキリするだろう?

永遠に続くと思つてた

終わらないと 変わらないと、思つてた

だけど些細な一言でアナタは変わつてしまつたね

でも私の心にいるのは

ずっと、ずっとアナタだけだから

アナタの失恋を聞いて

私は悲しくなつた

振り返つてくれないのは

もちろん悲しいけど

何より曇り空みたいなアナタを見ていられない

顔を上げて

いつもみたいに明るく笑つてよ

私はアナタが立ち直る事を祈り
毎晩涙する

神様は残酷だね

叶わない恋なんてさせないでよ

耐えられないよ

苦しいよ 悲しいよ

でも… ちょっとびり幸せ

繰り返し

いつかアナタが振り向いてくれると信じているから

私は今日も私の太陽を見つめ続ける

歌い終わると会場から大きな拍手が上がった。

ライヴ状況

「この歌は、私が初恋したときのことを書いたものです。相手の人は別に好きな人がいて、その人しか見ていないくて、私がなんどもアタックしてみたのになかなか気付いてくれなかつたんです。でも、決心して告白すると案の定断られてしましました。でも、どうしても彼を諦めることができなくて、彼のそばで彼を見つめ続けることにしたんです。次の曲は失恋したときに作家志望の友達が私の為に書いてくれた詩を歌にしました。」

遠坂は未だに俺のことが好きなんだな。俺は、罪な男だよ。こんなにも周りから愛されているのに、俺を愛してくれない人に想いを寄せているなんて。

でも、そんな女々しい俺でも遠坂はずつと見していくてるんだな。ありがとう。遠坂

今のが全感情を俺は奏でること以外、表現する方法を持たない。響け俺の想い！

哀詩

辛いときは存分に泣いて

楽しいときは大声で笑えばいい
この世界には希望が満ちている

辛いとき、悲しいとき 人生色々あるだりつ

失恋・入院・他界、色々あるだりつ
でも前を向いて！

明日は必ず来るんだ

たとえ君が人類最後の一人でも

その日、その時を大事にして欲しい

辛いことがあって友達に相談して
相手の子は親身になつて聞いてくれている
でも… 結局は

「早く忘れちやいなよ」「

一言で終わらせてしまつ。

そんな簡単に済まさないで欲しい

私の悲しみは忘れられない

永遠にこの胸に刻まれているだろう

幸福は身近にある

君はそれに気付いていないだけで

不幸だと思いこんでいる

少し顔を上げて冷静に

周りを見てごらん

一番気付きやすいのは愛する人とのふれあ

それでも分からぬなら…

きっと君は幸せの絶頂にいるんだろう

たつた一度きりの人生

貧乏でもいい

愛する人と一緒になり

幸せになろう

「」の詩を読んだとき、泣いてしました。でも、気付いたんです。私の幸せは彼の笑っている顔なんだって。いつまでもしつこいと思っている方、おられるでしょう。私もそう思います。でも、この気持ちだけは忘れない。そう私は考てるんです。次は、私

ではなくて今まで演奏してきてくれた一人に、全国大会で優勝でき
た曲、GAL�を歌つて貰おうと思います。」

GAL�、この曲は実は俺と隆史で俺たちのために考案した曲。
全国大会で遠坂に歌わせたのは少し、可哀想だと思つたけどこれじ
やないと優勝できないと思つたんだ。

俺は、隆史とこの歌を歌い短いライブを締めよつと思つ。

ライヴ状況（後書き）

更新遅れました。

先日、空き巣にあい、PCが盗難…

只今ネットカフェにて投稿しております。学生の身、高頻度でネットカフェに通うことはかなりの経済的負担になります。みなさまにはいち早く、小説を読んで頂きたいのですがこればかりは仕方ありません。

ですので、しばらくの間「休載」という形を取らせて頂きたいと思つております。（時期を見て、ネットカフェから投稿致しますので、ご安心下さい）

皆様の「理解と応援よろしくお願ひします。

盗撮ですか？！

無事、一回田のライブを終了させた。あのあとアンコールの嵐が凄かつたけど、俺たちはそれに応えようとは思わなかつた。

控え室に戻ると、いつの間にか柳が来ていた。

「さつきのライブ良かつたよ。高校生とは思えない、プロ顔負けの良さだつたよ。」

「つてなんでいるんだよ？ 関係者以外立ち入り禁止だぞ。さつきと出てけ。」

俺は邪魔者の排除に悪戦苦闘していた。

「そう、邪険にならないでくれよ。さつきのライブ、バツチリ撮影させてもらつたよ。今夜はコレを流して視聴率獲得だね。」

ん…？

「撮影したのか？ 本人達の承諾なしに…！」

俺は怒りのオーラを体に纏い、戦闘態勢に入る。

「カリカリしないでよ。文化祭の時に取りに来るつていつたじやん。」

「撮影料をよこせ。100万だ。」

「撮影料なら既に受付の人へ渡してあるよ。」

…マジですか？

「そんな怖い顔して硬直しないでwそいつ、もう一つ用事がつて来たんだ。君たちCD出してみないかい？」

「興味ナシ。やる気ナシ。面倒くさいので俺はバス。他の人雇つて演奏して貰つて下さい。」

もちろん俺は即答。

「俺は陽介とじやないと組む気がしない。」

「私は…二人じゃないと何時も通りの声が出せない…。」

よつてEDENメンバー全員一致で却下。

「だと思つたよ。でも僕は諦めないからね。絶対に君たちにはメジ

ヤーテレビーしても、もううか。」

「ほつ…俺たちに挑戦状を叩き付けたな。うひひひひ。見ておれよ、
痛い目に遭わさせてやるからな。」

「なんどいわれようと俺にはその気はねえよ。」
これ以上、柳にうだうだ言わるのがイヤだったので、柳を外に放
りだした。

その後、ライブのほうは超満員（立ち見客も数多くいた）でかなり
儲けさせて貰った。他の組の連中も急遽、体育館付近に店舗を増設
してライブ待ちの客の腹を満たしていた。

どうやら、今回は俺たちを中心に文化祭が回っているようだ。
さて、問題の部活ライブ。これは基本野外に設置されたステージで
各バンドが1曲だけ歌うというもの。なにが問題かというと、野外
＝無料なので客足は最高になると予想される。故に、学校が超満員
になると詭う恐ろしい現象が発生してしまうのだ！！

俺たちが歌う予定のは今日の日にとっておいた、俺の隠し玉。
隆史と一緒に作った、思い出深い曲だ。

盗撮ですか？！（後書き）

取りあえず一話更新。
歌詞、まだ考えてなかつたので次回に回します。○'z

超絶ライヴ（前書き）

今回は長め？です。

今話で登場する漢字、蒼穹は「そうきゅう」と読みます。意味は大空。辞書で調べるとより詳しく載っていると思います。

ついに来てしまつた、この瞬間。

俺たちは今、野外設営の臨時リハーサル室にいる。ここまで、到着する間、多数のファン（？）にサインを求められ、手を握られ、押し合いでし合い etc…。

そりや、戦争みたいなもんでしたよ。

「凄い人数だな。この学校始まって以来の事らしいぞ。」

隆史はどこから仕入れてきたネタなのか、自慢げに話していた。

「ほんどうが、俺ら目当てなんだろうな。」

俺はボソッつと独り言程度に言つてみた… なんだが

「その通り！ さつき、ライブの様子を局に送つたんだけど、好評だつたよ。」

「どこからともなく自称：俺たちのマネージャーといつ称号を掲げる柳がやつて來た。正直ものすゞ～～くウザイ。」

「帰れ。」

「そりそりそんなこと言われる少し凹むな～。でも、僕は君たちを絶対に離さないからね…！」

「あんた、プロデューサーじゃなかつたのか？ 俺たちのマネージャーとか言つて歩き回つてるらしいけど。」

「局の社長がね、こんな逸材をキープしておかいで他に取られるのはもつたいない！ それに多額の出演料が無駄になる。経費削減だ！！ つておっしゃつてね。それで僕が君たちのマネージャーになつたつてわけだよ。」

「ならんでいいわ…！」

「俺は思わず突つ込んでしまつた。」

「そう照れなくていいよ。」

「だがな、俺たちは柳さんと契約を結んでないから、他の音楽会社にでも契約することができるんだぜ？」

「もちろん分かってるよ。だからこうして他の虫が寄りつかないよう僕がガードしてるんじゃないか！」

そんな胸を張つて言つ事じや、ないだろ…。第一そのテンションがウザイ。

「俺たちは俺たちの意志で動く。柳さんに束縛される義理はない。僕もそんなつもり無いよ。コソ～っと後を追つて勝手にYVとか作つておくから～。」

「こいつ…、全然話が分かつてないようだな…（殺…）と、俺が怒りに燃えていると遠坂が袖をひっぱってきた。

「そろそろ始まるよ。」

「分かった。」

さてと、戦場に赴きますか。

ステージに上がるときの前には壮大な草原…もとい人の群れ（？）が校庭一面に広がっていた。校舎の窓と言う窓からは頭が覗き、そりやもう学校の文化祭とは思えないほどの人、人、人。

先にやつてた先輩方はこんな状況の中で良く出来たと、少しばかり感心した。

さあて、いきますか。

「ここにちは。」

唐突に遠坂がマイクを通して挨拶した。

俺は速攻終わらせようとしていたのに、なんだか出鼻をぐじかれた気分だ。

「今日は、お集まり頂きありがとうございます。体育館でのライブを聞いてくれた方にも楽しんで頂けるよう、別の曲を歌いたいと思います。この曲は、この一人がバンドを結成したときに作った曲で…。」

トップアイドルらしく、客の接待には慣れている模様。

でも、今回のは曲というよりな…。所詮中学生が作った駄作なんだ

さて、遠坂の挨拶も終わつたことだし、始めるか。
はじめは俺のギターの前奏から…。大空に響くように、優しく、丁寧に。

蒼穹

俺たちが出会つた思い出の記念樹
お互に求め合い支え合つバンド
不完全な二人ながらも 最高のメロディーを奏でよう
響け！！俺たちの心の音楽 永久に共に

大空を舞う鳥たちよ 何を見て、何を感じてるんだ?
地を這うケモノたちは 大空を見上げて問う

”空には何があるんだ？”

イカロスは空に憧れ飛び立つた

偽りの蝶の翼を携えて

彼は地に落ちはしたものの 何を見たんだ？

汚れ無き蒼穹を飛ばう！－

自ら翼を広げ さあ

我々は何を目的に存在するのだろう?
何をこの世界に満たせばいいのだろう?

我々を見守り続ける 蒼穹

お前は何を求める?

悲しみの縁、喜びの詩

人間達は空を見つめ 感傷に浸る

空を飛ぶ人工の器

汚れ無き蒼穹を汚し 傷つける

感傷に

我々は何を目的に存在するのだろう。

超絶ライブ（後書き）

急いでいる歌詞で申し訳ござりません。

一応、元ネタを考えたものの、今ひとつ出来。当方が執筆行程で変更したせいです。

今回は一話更新となりました。次はもっと具体的に下書きをして数話更新できるように勤めて参ります。

ファン多数

一組一曲がこの学校の野外ライブの鉄則である。俺たちは名残惜しそうな観衆を完全無視して、ステージから降りた。

「うん、やっぱり君たちの曲は素晴らしいね。遠坂さんじやないと二人の伴奏について行けなさそうだし…。本格的にウチでデビューしてくれる火が待ち遠しいよ。」

関係者以外立ち入り禁止の張り紙を無視した蛮行。柳は何喰わぬ顔で控え室に入つてくる。

「デビューするきなんてねえつていつてんだろ。こりねえ人だな、あんたは。」

俺は多少の皮肉を込めて言つてやつた。

「そりやあ、そうだよ。こんな逸材を手放すようなバカじやないからね。本人達の意見なんて世論の前では風の前に塵と同じ。」

「俺たちは陽介について行くだけだからな。本気でデビューさせたかつたら、陽介を懐柔するんだな。……まず無理だろうけど。」

「先輩達が使いたがつているみたいだよ。でようよ。」

こんな所に長居しても仕方がないので、遠坂の言つ通り控え室を出ることにした。

「サインください。」

「私E D E Nの大ファンなんです。」

おつかけとはまさしくのことだらうか？控え室の前には小規模ながらも、女性陣が待機しており俺たちに執拗にサインを迫つてくる。隆史なんか”好き”つて抱きつかれてるし。

「これが世論だよ。君たちが単独でこの場を抜けるのは厳しいだろうね。まあ、デビューさえしてくれたら僕たちが守つてあげるけど。」

「これは一種の脅迫である。しかし、俺はこんな卑怯な手でデビュー

しょうとうほどバカではない。ふ、柳後で楽しもうか・・・。
強気になつてみたのの、この人数と圧力（物理的な）には勝つことができない。何とかして彼女達にお帰り頂かなければ・・・。つか、まだ体育館でのライヴの仕事あるし・・・。そうか、クラスの奴を上手く使つて。

「隆史、委員長に電話して救出してくれるように頼んでみる。」

「その手があつたな。」

隆史は女性達に服や髪、いろいろな所を捕まれながら電話して助けを求めた。

数分後、なぜか「SP」の腕章を着けて救出に来てくれた。それはプロと見まごうばかりの腕前。正直、関心してしまった。「午後からのライヴが押します、早く控え室に入つてメシ喰つて準備して下さい。」

なぜに敬語？お前、もしかしてマジでこの仕事やつてねえ？

「わかった。」

遠坂が満面の笑みで返すとそいつはほんのり頬を紅く染めた。ふ～む、遠坂の人気は絶大だな。

控え室に戻ると、そこにはなぜか西城がいた。

「陽介！ライヴ良かつたよ～」

「そ、そつか。」

顔が紅くなつているのを自覚しつつ、観られないように伏せる。

「相変わらず遠坂さんの声つてすごいねえ」。私絶対あんな声でないよ～。

のほほんと笑つていてるその笑顔は罪です。これ以上私のチキンなハートを刺激しないで下さい。

「陽介、なに上がってるんだよ。」

苦笑混じりに隆史は耳うちする。

「つっせーよ、ちょっとビックリしただけだ。」

「またまた、無理しちゃってえ～。嬉しいんだね。」ノーヤロー。

「つるせえー。」

「なあに、ヒソヒソやつらのよあんたら。ギターのチューニングしたから弾いてみて。」

山口があきれ顔でギターを放り投げる。

うん、流石だな。いい音を出している。

「問題無いみたいだね。午後からひょいと回していくから、無茶な弾き方するんじゃないよ。」

俺の弾き方はギターに負担を掛けない感じ。思つつきり釘を刺された。

ま、いひこいつのだったらドジマーのいいかな?って思つたりしてる。

ファン多数（後書き）

本文が短い上に、更新遅れて申し訳ございません。

他の作品に浮気していたのもあって、ぜんぜんイメージが浮かばず、このよつたな結果になつてしましました。

毎日顔を出して下さった皆様に深くお詫び申し上げます。

なお、またしばらくの間、新連載を予定しております小説の下書きをしなければなりませんので更新できません。下書き終了後はひらくも執筆させて頂きます。

ひらくひらく愛読よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465d/>

青春謳華

2010年10月12日06時25分発行